

THE WAND OF YEEGREK

作者 : cherrywell

概要 : 魔法と剣のファンタジー冒険小説。破天荒な魔術士とストーリーを展開するさまざまなキャラクター達。謎を秘めた遺跡に存在する錫杖を目指す彼らの目的とは。

- 語り部 -

ここは一面の闇。空気の流れる音さえ聞こえない。想像も出来ない程の長い時間が流れ、ひたすら何も変化のない状態が続いた。

そんな空間に突如変化が起こった。遙か先の一点に微かに光が射し込んだのだ。それはゆっくりゆっくりと点から線に、次第に一条から複数の線となり、面となって広がり、その周囲を無から有に変化させていく。次第に周囲に存在する地形、建物が映し出されていった。

そこには風化した砂塵まじりの石垣によって構成された建物があった。外からの光が建物に反射すると共に、急に時間が進みだしたように内部から物音がしてきた。何か生物が光というエネルギーを与えられ、それによって動作し始めたような感覚だ。その音は嘶き叫ぶような低く鈍い音であった。

その音が周囲に響く中、光源側に一つの影が見えた。人の形の影だ。

「さて・・・何から話せばいいのだろうか・・・」

その影はゆっくり大きくなり、しっかりとした人影となった。

声と共に一人のローブを纏った老人が現れ、誰に対してと言うわけでもなく語り始めた。

「私には、宿命という存在意義があり、生る者にその価値を伝える義務という業を背負っている。この声が聞こえる者達よ。我が意図する波動を感じる事が出来る者達よ。認識という道具を用いて我が意志に応えよ。そしてその深き意味を理解し、後世に役立てるがよい。・・・我が名は語り部『ルーン・アウ・ンロウ』。親しき友『ラッシュ』に纏(ま)わる冒険を語ろうではないか」

そう言いながら、老人ルーンは大きな溜息を1つし、椅子に腰掛けた。老人が少し無言の間に射し込んでいた光が弱まり、それと逆に周囲の蠟燭(ろうそく)から仄(ほの)かな明かりが灯り、次第に大きな空間が現れた。それはまるでそこに立ち寄る旅人にこれから語られる物語の世界へ誘(いざな)っているようであった。

- 黒の術士 -

私が彼と出会ったのは単に偶然の出来事なのだろうか？いや、どうしてもそうは思えない。これこそ運命なのかもしれない。彼の不思議な魅力に感わされたのは私だけではなからう。

私はかつて、白魔術を駆使する僧侶として、島内を巡業し自らの信仰する宗教を広める旅をしていた。この世には様々な種族と宗教、その生活、といった環境が存在する。そんな環境において日常に大きく影響するのが自然からの恩恵ともいえる食物の供給である。この生活において必要となるエネルギーの供給は常に一定ではない。その時の自然の都合によって、人間は大きくその生活を左右されてしまう。この左右をする大きな要素として水の供給がある。文化が発展していないこの土地では、大陸のような科学が発達しておらず、自然の流れによってその生活を委(ゆだ)ねるしかなかった。しかし、我々僧侶は自然をコントロールすることが可能であった。その理由はこの世界の創造主の力を借りることが出来るという能力に長けていたのだ。創造主、それは神と呼ばれる無形のもの。しかし無形で目には見えないが、その力は絶大であった。我々僧侶は神と唯一コンタクトをとる事ができた。呪術と総称される魔法である。

その魔法にも種類がある。物理的に移動させるもの、無から有にし発生させるもの、有機的なもの特に意識を持つものを自在にコントロールするもの。それぞれに用途がついて回るが、その中でコントロールしやすい神が多数存在し、その得意とする神に従順である宗教に属した術士がその呪文を使いこなすことが可能となる。我々僧侶は、この呪術の種類に"色"を当て総称した。私が専門とする白魔術はその1つである。白は基本として生活において保護することを中心としている。賢者にでもなればその究極魔術でも使用することは出来るであろうが、我々僧侶は魔術を習得することが目的ではなく、人の擁護(ようご)やその生活に役立てる為の知識向上を目的としている。白魔術を利用する者は、その力を借りるべき神に対する大きな信仰心がある。決して驕(おご)ることなく拝借するのだ。

たしか、記憶が定かではないのだが・・・とある島の北部であったと思う、漁村に立ち寄った事があった。そこではその村独特の祭行事が催されていた。村は小さいながら活気に満ちあふれており、漁師達が得た海からの恵みによって潤っていたようだ。私がおその村に到着した時に、精霊魔法の術師、俗に言う召喚師が数人、まるで芸を見せるかのように小妖精を呼びよせ、周囲の村人の心を和(なご)ませる催しを開いていた。

「・・・惑いし木々に眠る・・・小さな天に仕えし子達よ。古(いにしえ)の聖なる言葉に応え、その美しき姿を現し、その輝かしき力を我が頭上にて降り注げ・・・ア・ダーム・イル・セ・フォルテムン・イ・・・」

彼らはそう呪文を唱えてから静かに目前にある水晶玉に向かって手をかざした。その途端に周囲の木々の蔭から仄かな光を発散しながら妖精達が出現し始めたのだ。村人達は、この光景を待っていたかのようにお互いの手を取り合っで喜んでた。このような習慣によって妖精が出現する村では、その年の作物の収穫状態などが判る様になっていたようなのだ。これも彼ら住民にとっては大事な行事なのかもしれない。

私がおこの習慣に心を落ち着かせて居た時に、私の宿命上重要な彼との出会いが始まった。

「大変だ！山の麓(ふもと)で火事だ」

一人の村人が走りながら叫んでいる。それを聞いた他の村人達も動揺が隠せないようで、騒(さわ)めきながらどうするか話しているようだった。

「私は、たまたま通りかかった僧侶ですが、若干の術を心得ています。小さな鎮火(ちんか)くらいならば行えますが、そこへ案内してもらえませんか？」

私がおそういうと、大きな歓声(かんせい)が湧き起こり村長と思(おぼ)しき老人が私に向かって握手をしてくた。「事が事だけに猶予(ゆうよ)がありません。すぐご案内しますので、お願いします」

その老人と数人の村人、そして私は走りながら現地に向かった。

火事と聞いた時点では麓(ふもと)と確認していたが、どうやら既にかなりの範囲で火が回っていた。広範囲なので瞬間的に鎮火

するのは無理であると判断した私は、村人達に合図だけして全体を見通せる平地に向かって走った。

「あまり、範囲が大きくなると私の魔力でも防ぎ切れないな……。風の精霊達を司る神シルフよ、我が伝えたる言葉を認識したならばその名の元に大きな風をもって大地に蔓延(はびこ)る炎を吹き払え。……。オールド・ワル・セ・シルフェロ・ガサ・デ……。」

しばらくすると空に暗雲が現れ、見えない力が過ぎていった。そして、ほとんどの炎が吹き飛ばされ彼方へ消えていった。

「まあ、これで何とかなるでしょう……。」

村人達は驚き、歓喜した。「素晴らしい。何と御礼を言えば……。」

「何しやがる！このクサレ外道の坊主め！」

突如、私の後方から声が聞こえた。

「……。ア・ガムンテ・セピナ・ヴァルク・ソイータイ！！。雷よ！怒りの神ヴォルトよ！大地が蠢(うごめ)くほどの槍を突き刺せ！」

それは瞬間的だった。

ズドオオオオン！！

私の周囲に大きな閃光(せんこう)が走り、大きな音と共に大地に穴が空いた。それは一つではなく、まるで雨の様に降る光の刃(やいば)のようであった。

「何だ！？何をするんだ！やめるんだ！……。やめろ！」

私は何が起こったのか確認する間も無く、周囲から見える光と大地の揺(ゆ)らぎから感じられる衝撃に驚いていた。

「ギャハハハハ！やべえゴブリン共を退治してやってんのよ。坊さんは黙って見てやがれてんだ！」

「??？」

私は呆気(あっけ)にとられて状況判断出来なくなっていた。どうやら黒魔術師の様だが、その技の連発が並ではない。そして、彼の発する言葉の意味が不明でどう対処すればいいのか判らなくなっていたのだ。周囲に居た村人達もあまりのショックで腰を抜かす者や両手を組みながら祈る者ばかりで、全く身動きとれない状態が続いた。

「お前は何者だ！？この地の災害を食い止めようと我が術にて抑えたものを、なぜ邪魔するのだ？」

とにかくこの場の状況を打開する為に、私はその青年に向かって声を発した。

しかし、「うるせー、今それどころじゃねーんだよ！。邪魔すんな、ポケッ！」とその青年は無視するだけだ。

このままでは大地が荒廃するだけだと思った私は術を唱え始めた。

「すべての大地を司る神ガイアよ、我が伝えたる言葉を認識したならばその名の元に巨大な壁を造り、荒れ狂う衝撃を迎え撃て……。オールド・イル・セ・ガイエス・ミロ・シュリア……。」

ズザザァァァ！

しばらくすると大地の一部が揺れ、地が割れ、そこから大きな土の壁が突きあがり、周辺の大地を覆(おお)った。そのバリアともいえる壁は青年の発する雷を弾(はじ)きながら次第に地域周辺を覆っていった。

「てめえ！邪魔ばかりしやがって。俺のやる事を邪魔する奴は坊さんでも許さねーぞ」

「なにを言う！お前の方こそ、暴れているだけではないか。このままではこの地に生きる者全てを消しかねんぞ。いったい何がしたいのだ！？誇り高き魔術を善からぬことに使いよって、それでも魔道士か！」

「何訳わかんねえ事言っやがる！これだから坊さんはヤだぜ」

さすがの私もムッときた。これでも誇りある神聖白魔術教会の伝導魔術師である。今まで教会の教えを守って真面目に取り組んできたのだ。自分の職業についてこんな若造にどうのこうの言われる筋合いはないのだ。

「このガキがあ、バカにしよって！もう許さん、目に物見せてくれる！」

キレた。基本的に白魔術には攻撃系などないのだが、護身としての魔法ならばいくらでも方法はあるのだ。私はその場で呪文をブツブツと唱え始めた。

「ひゃっひゃっひゃ、坊さん俺と腕比べでもするつもりかい？こりゃ参ったねえ」

彼もそう笑いながら動きを止め、呪文を唱え始めた。

村人達は、あまりの状況のひどさに怯(おび)えて、腰が抜けながらもその場を退散しようと必死であった。「やめてくれえ、村が目茶苦茶になるうー」

「……水の精霊を司るウンディーネよ、我が魂の叫びが気の流れによって運ばれたのならば、大きな水流の刃にて我が身を守り、襲ってくる物を打ちめせ……オールド・イル・セ・ウンデヌート・デル・エソラ……。ダァァ！」

普段ならばこういった迎撃系魔法なんぞ使うことはないのだが、キレた私には教会で封印されている呪術の使用も関係なかった。もちろん、この術のことがバレていずれ教会でお叱りをうけるのだが……(汗)。私の周りを大きな水の柱が囲った。その高さは数メートルにも及ぶ。

「へえ、なかなか坊さんやるじゃねーか、結構精神修行してんだな。ま、それならこっちもやり甲斐があるってもんだ。……アガ・ムンテ・イ・フレム・ソーデ・ギ・炎よ！爆発の神イ・フリートよ、我が古の言葉に応え大いなる力を用い、敵の障壁を砕け！」

大きな一本の炎が彼の手より発せられ螺旋(らせん)を描くかのようにこちらに向かってきた。

「うおおお！」私は腕を組みながら精神強化の呪文にて水流の柱を強固な物にした。

バシィイイ！

二つの大きな力は衝突し、激しく交差した。しかし、私に分(ふ)があった。炎に対して水流は消却の術となり、相手のエネルギーを吸収するように緩和していったのだ。

「ふん……。それで終わりと思うなよ、坊さん」

不適な笑みを浮かべながら、彼は腕を静かに天に向かって掲(かか)げた。

「ダル・ギ・シルフィー・ソル・デ・ガント！風よ！鋭利な刃となり炎を包め！そして堅固な壁を貫きその主めがけ突き刺され！」

私は驚いた。「炎を収めずに、べ、別精霊を同居させるだと！？水に油を注ぐようなもんだ。そんな呪文では逆効果になぞ。まだまだ甘いな、若造」

ところが、私の考えの方が甘かったのだ。炎は間隔を空けながら螺旋状にこちらに突き進んできた。そうなのだ、その周囲には目に見えない風の力があり、私の放った壁にぶち当たって衝撃となったのだ。

「うおおお！」

しかし、この衝撃が私に幸いした。この反動で私の体は空高く舞い上がった為助かったのだ。障壁として成り立っていた水流は風圧で木っ端微塵(こっほみじん)に破壊され、炎の螺旋はまたしても大地を貫いた。私は空を落ちていながら、意識を回復し、体制を整える為に、浮遊の呪文を唱えた。

「くそっ！こ、こいつ・・・なかなかやるな！」

「ふん・・・この程度で終わりかよ、坊さん」

私は宙に浮きながら少し間を空けて、呪文を唱えた。

「・・・ブツブツ」

「さあ坊さん、遊んでる暇はねーんだよ。こっちはこれから・・・」

その時、先ほどの水流が瞬間的に凍り、砕けて、彼に向かって襲いかかった。

シュルルルル！

「！」

その氷の破片達は大きな球形を形取り、彼を包み込んでしまった。

「・・・けっ、くだらねー。これで牢屋にでも閉じ込めたつもりか！？」

彼はまたしても呪文を唱え始めた。

私は呆れて大きな溜息をついた。「まだやる元気があるのか・・・」

そして右手を手前に掲げながら、その水流の串を小さく変形させ彼の体を拘束していった。

「うおっ、てめえ！何のマネだ！」

「あまりに遊びがひどすぎるので、お前を縛った。これ以上暴れるようでは、村人達に迷惑がかかるのでな。それでもやるというならこの水流の縛(しば)りはどんどんお前の腕に食い込むぞ」

「バカやってんじゃねーよ！そんなことやってる間に・・・」

- 闇妖精の影 -

ドオオオオオオオン！！

「なんだ！？」

私は後方に発生した大きな地響きに驚いて、振り向いた。そしてそこには一匹の巨大な岩の化け物ゴーレムの姿があった。

「こ、こいつは！？」

私が言葉を吐いている間にも巨大な岩の腕が、私や青年に向かって襲いかかってきた。「ぐおおお！」「ふんっ！」

私は浮遊の術で離脱するようにして、その攻撃を免(のが)れた。しかし、青年は私の呪縛呪文による水で身動き出来ない状態の為、そのまま直撃をくらった。そして彼の体はゴーレムが大地に向かって叩きつけた腕の真下で潰(つぶ)されてしまった。

「ああ！なんてことだ！？わ、私のせいで・・・」

そんな事を言っている余裕は無かった。ゴーレムは腕を大地に叩きつけた状態のまま首を上げ、浮遊する私に向かってガンをとばした。さすがの私もゾッとしてしまった。

「何故、こんなにゴーレムが暴れて、しかも知能が高いのだ・・・！？」

私は再び呪文を唱えた。「水の精霊を司るウンディーネよ、我が魂の叫びが流れによって運ばれたのならば、水の包容によって我が身を覆い、迫りくる岩の衝撃を抑えよ・・・オールド・イル・ラ・ウンデヌート・イル・バリク・・・」

私の浮遊する位置の真下の大地が裂け、その割れ目から水流が立ち上ってきた。それは瞬間的に私の周りを囲い大きな水滴となって私を包んだ。

ゴーレムは私の動きを確認したのか、地面に叩きつけていた腕を上にあげ私に向かって殴りかかろうとした。ところが、どうしたのかゴーレムの動きがにぶい。

「・・・むう、どうやって防ぐべきか・・・あれ？」

ゴーレムの腕が大地から離れず、体だけが蠢(うごめ)いていた。なんとも滑稽(こっけい)な図だった。

何が起きているのかさっぱり判らなかったが、これを都合よく私はゴーレムを黙らせるべく、奴を大地に帰還(もと)させる呪文を唱えることにした。

「すべての大地を司る神ガイアよ、我が伝えたる言葉を認識したならば巨大な岩石の魔物を落とし入れる為の大きな亀裂(きれ)を大地に造れ・・・オールド・イル・ミ・ガイエス・テラ・ゴリアテ・・・」

ゴーレムが立っていた地面が少しづつ揺れ動き割れ始めた。

「！？」

ゴーレムの腕の先から、大きな炎が立ち上った。

「な、なんだ？」

先ほどからおかしいと思いつつも防御することで精一杯だった私は、その光景に呆気(あっけ)にとられた。

「・・・その・・・された体を・・・ガ・・・フリーテ・・・」

ドゴオオオオオオ！！

なんと、ゴーレムの腕が吹き飛んだ。

「え、えええ??な、何が起こってるんだ?」

「ふざけんじゃねーっ!」

あの青年だ。死んではいなかったのだ。吹き飛んだゴーレムの腕の爆煙が消え、彼はその場で腰を屈(かが)めながら姿を現した。

「おっさん!くだらないことするからこっちがやりにくいだろうが!わかってんのか!??」

「あ、あの状態で生きていたのか?・・化け物か!??」

「だれが化け物だ!魔物と一緒にすんじゃねー」

いや、人間技じゃないぞ・・普通は。もしそうなら私は夢を見ているのに違いない。

「坊さんの氷結呪文のおかげで、危うく精霊の仲間入りすところだったぜ」

腕を吹き飛ばされた片腕のゴーレムが再び動き始め、今度は青年に向かって襲いかかってきた。私は状況察知し呪文を唱えて水壁魔術を強化し、彼の元へ移動した。

「おめーは後回しでいいんだよ!でっけ一面はあっちへ向けてろ!」

「でかい面とはなんだ!失礼な!」

「.....坊さん、また邪魔すんのかよ.....」

でかい面とはゴーレムの事である・・。青年はまた呪文を唱え始めた。

「レ・ガムラド・セビヌ・ヴァルク・ラガーテ!!。雷よ!怒りの神ヴォルトよ!八つ裂き(やつざき)の閃光(せんこう)の刃で闇に蠢く悪しき魔物を突き刺せ!」

空が一瞬曇ったかと思うと、雲が大きな渦を造りその中心から稲妻が走った。しかし、それはゴーレムとは全く違う位置に向かって落ちたのだ。

「(え?)」

「グギャギャァァガガァァ!」

驚いた。ゴーレムとは別に地の小妖精であるゴブリンが隠れて居たのだ。つまり、彼らが巨大なゴーレムを操り、この地で何かをやろうとしていた訳だ。でなければ、知能の低いゴーレムが暴れるのは不思議な事だ。

ゴブリンからの命令らしき声が聞こえなくなったゴーレムは、声ともとれない大きな振動音を発声しながら頭部に手をやり、もがき苦しんだ。

「何にもできねー独活(うと)の大木め。遊びはこれくらいにしてとっとと帰れ!」

そして若者は再び呪文を唱えた。どこからともなく強い風が巻き起こりゴーレムの巨体を包んでその体を削いでいった。まるで洗濯機だ。

「す、すごい.....」

私はその連発する魔術に対する精神力の強さに感動さえ覚えた。

ゴーレムの体は大きな砂塵となって1つの山を拵(こしら)えた。

「さて、つまんね一遊びは切り上げてと・・・」

青年はそう言いながら身に降りかかった砂を手で払い、その場を去ろうとした。

「ちょ、ちょっと待て。お前、いったいここで何をしていたんだ？」

私は今までの出来事が未だに整理できずに居たので、彼に真実を確認するしかなかったのだ。「この火災の原因はこのゴーレムとゴブリンによるものなのは何となく理解できたのだが、何故それが察知出来たのだ？それに・・・」

私の言葉を遮(さえぎ)るように青年が私に言った。

「んまあ、坊さんに恨まれるのも後味悪いからな。一応教えておいてやっけど、あんた達がここに来る前にゴブリン達が渓谷(けいこく)辺りで狼煙(のろし)を上げていたんだよ。奴らにしてはやけに知能的な動きしてやがったんで、何らかの呪術を操る奴が紛れ込んでいるとふんだわけさ。案の定、召喚士(シャーマン)らしきゴブリンが一匹紛れ込んでやがった。ダークエルフにやられた知り合い(タチ)から、このところこの周辺で怪しき呪術場らしき祭壇の跡が見つかっていると聞いていたんでね」

「ダ、ダークエルフ！・・・」

「まあ、動きとしては大したものはないんだが、この50km四方で円を描くかのように何らかの力が働いているらしいってんで。んまあ、俺としては・・・」

私は驚いた。今まで修行をしていきながら周辺の地を放浪していたが、それらしき動きの噂一つ聞かなかったのだ。にも関わらずこの青年は他の呪術師からの情報を得て、いち早く動きを取っていたわけだ。私のようにたまたま出くわした訳ではないのだ。

「・・・という感じで、やつらの・・・」

「ちょ、ちょっと待ってくれ。話の内容はよくわかったよ。ただ、だからといって周囲に村人が居るにも関わらずあのむやみな呪文の連発はなかるう」

「はあ??」

青年は呆気にとられた。「あの場にあんたらが来るまでは誰もいなかったんだぞ。勝手に現れて邪魔したのはあんたらだろうが。呆れるぜ」

「う・・・」

状況がつかめなかったとはいえ、彼の言うことは正論だ。しかし、瘦(や)せても枯れても私も一修道僧侶、本来正しいものの道理を説くのも役目なのだ。

「と、とはいえ、大地を荒廃してまでの呪術乱用は問題ありだ。これだけ荒れてしまうと後の復旧が大変だ・・・」

青年は私の言葉に啞然(あぜん)としながら大きな溜息をついた。

「ああ、坊さんの説教はなげーな。わりーけど、俺の知ったこっちゃねーんで、退散させてもらうぜ！」

そう言ったかと思うと彼は無造作に呪文を唱え体を浮遊した。

「あ、ちょっと待て！」

周囲に小さな白色の風が吹き、彼の体を包み込んで・・・そして消えた。

一連の騒動で周囲は砂塵と瓦礫(がれき)の山、燃え尽きた木々の破片だけになってしまった。私は、のびてしまっている村人達を抱き起こし、周囲の修復の準備を始めた。

- 遺跡 -

「この地に眠る古代王朝の財宝(おたから)を探しに来たんだよ」

そう言いながらガローダは酒を片手に踊っている。私と剣士マーベラスは同じく料理を口にしながらその滑稽な踊りを見て笑っていた。先日の出来事から私は修道の地をここに変え、彼ら二人と出会って食事を共にしていた。マーベラスは「ナ」国の衛士であったが、この地「ラ」国で行われた剣術大会に出る為に旅をしていた。その途中にガローダと出会い共にチームを組んでいるわけだ。ガローダは女盗賊(シーフ)。どうやらマーベラスはガローダに焚(た)き付けられ、共に財宝を探しに行くようだ。

「お坊さんも修行で人に教えを説いてるばかりじゃ疲れない？あたしゃお堅い生活は御免だねえ」

ガローダはそう言いながら私に向かって酒の酌(しゃく)をした。

「最近さあ、この周辺にある複数の遺跡に見慣れない石版(スレート)が見つかって、どうやらそれら全部が同じ様な内容を刻んでいるらしいんだよね。その内容っていうのが「ラ」国王朝の紋章の形に似ているんだけど、その周囲を覆うかのように古代文字が刻まれているのさ。それぞれが何を意味しているのか今の所解明されていないんだけど、あたしらが暴(あば)いて財宝を載いっちなおうって事なのさ」

さすがに盗賊だけあって情報に詳しい。彼女はありとあらゆるネットワークを持っていて、その情報筋から財宝のありかを掴(つか)んでいるようだ。そんなお喋(しゃべ)りな彼女とは対照的にマーベラスは無口で、ゆっくりと酒を飲み干していった。私はどちらかというと彼に対して興味があった。剣士としての腕が如何(いか)程(ほど)のものなのか、パーティリーダーとしての器量など人としての成りが気になった。マーベラスは剣士の割にがっしりとした体格でもなく、血気盛んな風貌(ふうぼう)でもない。そんな彼がどのような剣(けん)捌(さば)きをするのか興味が湧いてくるのも不思議ではないだろう。

「君は今までどんなクエストを体験してきたんだい？」

私は彼に向かって過去の冒険談を聞きだそうとした。

「い、いや、俺はそんなに大した冒険なんかはしてないんで、これといった武勇伝は無いんだけどな・・・」

彼は照れた風でしかも少し口べたっぽい感じでもあった。私が思うにガローダが怒濤(どとう)の言葉数でマーベラスを口説き落としてパーティ結成したのではないだろうかとかさを感じる。少し歯に噛みながら笑みを浮かべ彼は食事と酒を楽しみ、私の質問をはぐらかした。それなりに謎の多そうな男だが、見ている限りでは剣や防具など整えられて手入れしている感がある。そういう剣士こそ手強(てこわ)いものだ。

「ねえ、お坊さん。あたしら明日遺跡の検証をしてみようと思ってるんだけど、一緒に見に行かない？お坊さんにはお宝は興味無いかもしれないけど、それなりに面白い物がみれるかもしれないよ」

にっこり笑いながらガローダが私の腕を掴み、所持していた布袋から地図らしき巻物を引っぱり出してみせた。

「これ、この周辺にある遺跡を記した物なんだけど、放射状に広がった位置にあって何かの進行方向を示してる様に思えるんだよね。なにかさ、あたしに『謎を解きにおいて』って言ってるみたいでさあ」

その地図を見せられて私も少し興味が湧いた。この辺りの地形を描いた地図なのだが、遺跡の分布する位置を線でつないで、その交差する区画がほぼ一致しそうなのである。それが妙(た)に怪しく見えて、まるで人為的に作られたトリックであるかのように思えた。

「この遺跡だけでも十以上あるな。それを一つ一つ調べていくつもりなのか？」

私はガローダに向かって質問してみた。

「いやだねえ、そんな事してたらどれだけ時間かかるか判ったもんじゃないよ。実は既に色々調べてはあるんだけど、北東にあるグレートピング山脈の麓の遺跡にある石板に他とは異なった呪文が書いてあるらしいのよ。他の地区の石板よりも文字数

も多いし、きっと謎を解き明かす基礎の事項が書いてあると思うわけ。そこから解明していけば近道になると思うのよね」

「なるほど。まあ、私も巡業中の身ゆえ、あまり遊んでもいられないが、興味が無いわけではない。明日同行してみてもいいな」

「おっ、なかなか話わかるじゃない。それじゃ今日は、どう行動するかを話しながら飲み明かそうじゃない。ちょっとだけなら奢(おご)ってあげてもいいよ」

「(・・・ま、まだ飲むのか?) い、いや、酒はもういいよ」

「なんだ・・・お酒くらいしっかり飲みなよ。お坊さんでも人間だろう? 酒は百薬の長だよ」

そんなことは判ってる。しかし呑めない物は呑めない・・・。私は呑み過ぎると笑い出す・・・。そんなことを言いながら夜は更けていった。

待っている訳ではないが朝が来た。私は僧侶定例の礼拝を簡易に済ませ、身支度を始めた。宿の私の部屋の扉を誰かが叩く音がしたので応答してみた。

「何の用かね? こんな朝早くに」

「申し訳ありません。昨日お泊まりになったお連れ様が既にお出かけになられたのですが、宿泊のお代はそちら様に請求するようにと仰られたので、不躰かとは思いましたが請求に参りました」

どうやら宿屋の従業員らしい。しかし、どうも私はハメられたようだ。彼らの分の金も支払ってやるハメになってしまった。これも私の至らぬ部分と諦め、自分を戒めた。そしてそのまま彼らの言っていた遺跡の事が気に入り、その場へ行くことにした。

「私も物好きだな・・・。たしかグレートビンガ山脈だったか」

のんびりと現地へ趣き、到着したのは昼前であった。季節的には初夏を迎えるところで少し汗ばむような気候であった。この島国は四季があり、一年の循環を感じさせる。

「この辺りか・・・」

遺跡の柱と思われるものが何本も建ち並び、大きな岩の崩れた跡が続いている。旧王朝の繁栄を表すかのような石像や飾りが多くみられる。柱や壁などに多くの呪文らしき文字が刻まれ、私にとっても非常に興味深い物であった。時間の許す限り私はそれらの呪文を解読しながら、旧王朝の歴史を学び取っていった。なぜ栄華を誇った王朝が滅びの道を選ぶ事になったのか、史実と比較しながらこの現実の記述を見るのは非常に奥深い物があったのだ。人の生き方や感情による支配によって大きな権力もいつかは壊れる事があるというのは、我々修道僧にとっては教えの一つでもあるのだ。清楚(せいそ)な心を持ち、人を支配する邪念を祓(はら)う事が自らの幸福を贖(もたら)すというのが我々の教えでもあるのだ。その教えを浸透する事を促すのに魔術を利用することも多々ある。私が物思いに耽(ふけ)っていると遺跡に続く道周辺から人の群れが現れた。

「この辺りにお住まいの方ですか?」

私は彼らに声をかけ、この地の状況を把握しようとした。

「これはこれは、お坊さま。この様な荒れ果てた遺跡においでとは、有り難い事です。我々はこの地に住む者ですが、最近、多くの旅行者達が遺跡の発掘に現れ、事ある事に盗掘していく有様です。我々は自警団を作って何とか妨害しようとしていますが、連中はある意味プロフェッショナルのように我々の罠を掻(か)い潜(くぐ)ってしまいます。このままでは我々の祖先が培ってきた財産が物色されいつか無くなり、いずれは風化した荒れ地だけが残る事となってしまいうでしょう」

「それは困った事ですね。実は私はこの地にある石板の刻文の解読を目的として訪れた次第です。その文が何を現している

のか、人々の為にまた自然に生きる者の為になる事であるのかを確認することが必要と思ったのですが・・・」

彼ら住人達は顔を見合わせた後、安堵(あんど)した調子で応答した。

「そうですね。実はこの地だけではないのですが、他にも旧王朝遺跡がある場所で災害が起こっていたりするのです。大半が何らかの魔物が出現し、それによる被害を現地の住人が受けているという話をこれまでも沢山聞いてきました。大変不躰とは思いますが、ここでお会いしたのも何かの縁です。なにとぞお坊さまのお知恵を拝借してこれらの災害から我らをお救いください。また、この地に訪れる盗人(ぬすっと)達を懲らしめください」

ある意味、昨日までは私もガローダやマーベラスと一緒に行動し、盗人の手助けをしようとしていたようなものなのだ。彼ら住人の言葉を聞いて、自らの行動を恥じた。

「なるほど。全身全霊をもってこの難問に立ち向かいましょう。私も一修道僧として恥じることの無い行いをしてみせましょう」

人というのはもし何らかの間違った行動をしても、その間違えに気づき、それを再度行わない、それを未然に防ぐという信念に目覚めることが大事なのである。その考え方をいかにして他人に深く伝えるかが私の人生をかけた仕事なのかもしれない。

住人達は私の言葉を聞いた途端に、その場に跪(ひざます)き頭を下げた。私はゆっくりと彼らの手を取り、「会釈(えしやく)は不要。まずは石板の場所に案内してください」と話した。

大通りが中心にあり、その周りには先ほどと同じ半径一メートルはありそうな太い石の柱が立ち並んでいる。広い、本当に広い空間に出くわした。

「ここは恐らく旧王朝の宮殿らしきものがあつた場所だと思います。石板は玉座と思われるあそこにあります。我々の仲間が近づいた時に罠(トラップ)に墜(はま)り大怪我にあつた為、今では誰も近づきません」

私はそれを聞いた後、腕を組み、少し考えた後に、彼らに向かって凝視(ぎょうし)するように手で指示した。そして、石板の場所まで少しづつ歩み寄っていった。

「(・・・トラップという事は、何か特定の者以外は近づけたくない理由があるわけだ。ならば何らかのクリアする要因さえ身につけていれば安全であるという事でもある。恐らく大半の盗人達は意気込んで突入したのであろうが、まずはその周囲に存在する何かヒントを示しているはず。それを探るのが先決だな。)」

玉座には2つの壊れた鉄板(プレート)がはめ込まれたテーブルとその時代の王が愛用したと思われる古びた盾と矛、そして鞘(さや)からはみ出した状態で放置されている綻(ほころ)んだ剣が見える。盗人が何らかの方法で玉座まで近づき、それらをその位置へ移動した結果なのかもしれないが、アイテムとしてはそれらだけが残されていた。何年も雨に晒(さら)され、原色さえ留(とど)めていない絨毯(じゅうたん)も悲しげにそのアイテムまでの道を示している。

「あのプレートには何が刻んであるのか・・・やはり近づかないと確認できないな」

私は少々躊躇(ためら)いもあつたが、一歩づつ絨毯の上を進み、その度に何かヒントとなる物を探した。およそ二、三メートルほど近づいた時に絨毯の下にある僅(わず)かな膨(ふく)らみを足で踏んでしまった。その途端に天井より数本の矢が地面に向かって飛び交つた。シュッ！！

「うおっ！」

私は瞬間的に仰(の)け反(そ)り、後方に尻餅をついた状態になった。周りに居た住人達が私の安否を確かめるが如く近寄ってきた。

「お、お坊さま！大丈夫ですか？！ああ、何ということだ・・・」

「ふう・・・何とか矢には刺さらなかったよ。しかしちょっと油断しましたね。もう少し慎重にしなければ・・・」

私は立ち上がり体についた埃(ほこり)を手払いしながら再度周囲を確認した。先ほどの行為で、私がトラップに引っかけた膨んだ場所の絨毯が捲(めく)れ、トラップのスイッチの姿が見えた。私はそれをまじまじと見ながら一つの方法を思いついた。

「そうか、なるほど」

私は周囲を見渡し、小石程度の投げられる物を探した。足下に丁度具合の良い煉瓦(れんが)があった。それを拾い上げ、スイッチに向かって投げつけた。しかし、何も起こらなかった。「やっぱりな……。しかし、再度起動するという事は、スイッチを有効化する物もあるという事だろうな……」

私は再度煉瓦を探し、それをスイッチ目掛けて投げつけた。しかし何も起こらなかったようだ。

「ということは、再起動させるスイッチは別にあるという事になるな。よし！これなら行けるかもしれん」

私は再び絨毯に沿って歩き始めた。他の住人達は皆恐る恐る見守るばかりであった。先程のスイッチを踏んでみたが、これといったトラップは発生しなかった。私は同じ様に周囲にある煉瓦に行く先の絨毯目掛けて投げつけた。同じ様なトラップが再発したが、大事には至らなかった。少しずつ進みながら、煉瓦を手にとった瞬間、今度は石壁が横から突き出てきた。ゴゴゴゴ！

「あ、危ない！」

石の大きな壁が周囲の置物もろとも私の体を跳ね飛ばしたかのように見えた。が、私は瞬間的に浮遊の呪文を唱え、その進行方向に相対的に移動した。石の壁はある程度まで伸びた後、再び同じ位置にゆっくり戻った。

「おおお、お坊さま。見ているだけでハラハラしますよ……」

「これくらいであれば心配せずとも良いです。修道院では体術等も会得しておりますからね。だが、今のはさすがに焦りましたよ」

なんとか時間をかけながら玉座に近づいてきた。プレートの文字がある程度見える範囲まで来た時に、私は覗き込む様にプレートの文字を解読し始めた。

「古代象形文字が多いな……確定的な分析は出来ないが、大まかな意味は掴めそうだな」

しばらく無言の時間が続いた。私がじっと腰を下ろしたままプレートを眺めているので住民達も不安げな表情が続いた。どれくらい時間が過ぎたのか判らぬが、私はある程度理解出来た上で大きく声を発した。

「すまんが少し協力してほしい。松明(たいまつ)を数本集めて、この部屋にある柱に備え付けられている灯りの尺に篝(かがり)火(び)を焚いて欲しいのだ。それも一カ所残さず全部だ」

それを聞いた住民達は、すぐに納得して二、三人現地に残したまま、走り去った。残った住民は私が無言でじっとしているので、心配そうに伺っていた。私は少し照れながら話しかけた。

「心配せずとも良いです。これといって危険ではないですし、もうある程度の謎は解明出来たと思いますから」

住民達はそれを聞いて、驚き、歓喜した。

「いま、用意してもらっている松明による照明をこの部屋に入れれば、その灯りが形取り、示す文字により旧王朝の力が現れるという。その力というのが何であるのかは判らぬが、今はその指示に従うしか無いであろう。それに、その力に恩恵するアイテムとして玉座の剣と盾、矛が用意されていると記されているのだ。この力が何の為に仕組まれたのかはわかりませんが……」

再び沈黙が続いた。その力というのが何を表すのかが不明である為、現地に居る者の脳裏はその解明で一杯であったのであろう。そうしているうちに出かけていた住人達が戻ってきた。彼らは言われた通りに、一本の火のついた松明から他の松明に移し火をし、それらを柱の尺に差し込んで行った。

「これで全部だと思いますが、宜しいでしょうか？」

「はい。それでは少し離れていてください。みなさんに衝撃がいかぬようにしなければいけませんので」

彼らはすくすく部屋の外側の道まで出ていき、私の動向を伺った。そして、私は呪文を唱え始めた。

「・・・天地の境を彷徨(さまよ)う声を発する者よ。その叫びを抑え、この地にかけた封印を解き放て。大いなる力を目覚めさせその力を以(もつ)てして・・・」

「お坊さん、ちょっと待ちなよ！。今、その呪文かけちゃダメだよ！」

どこかで聞いた声だ。暗い部屋の一角からその姿は現れた。

「お、お前達、居たのか」

私は彼らの姿を確認して、呪文を止めた。ガローダとマーベラスであった。

「この呪文は今の時刻にかけるととんでもない事になるよ。あと半時待った方がいいよ」

「何を言う、お前達。私を騙(だま)しておいてよくそんな事を言えるな。僧侶を欺(あざむ)くとはいずれ神の裁きがるぞ！」

「言いたいことは判るんだけどさあ、あたしらにも事情ってものがあるね。別にお坊さんを騙すつもりじゃ無かったんだけどねえ。それよりも謎を解きたいんじゃないのかなあ？あたしらならいい情報あるんだけどねえ、協力しようよ」

私の目には彼らは普通の盗掘者にしか映っていなかった。住民達に約束した以上、彼らの様な盗掘者を許す事は出来なかったのだ。

「お前達の言うことは信じられない。人を欺く様では人からの信頼も得ることはできないという事を思い知れ」

そう彼らに罵声を吐いた後に、そのまま私は呪文を続けた。しかし、これといって大きな変化は起こらない感じだった。

「なぜだ・・・？プレートの指示通り行っているのに」

ガローダはそれをみて否定した。

「いや、何も起こってないわけじゃないよ」

- 竜 -

ドゴゴ ゴッゴゴゴゴゴゴ!!!

「な、なんだ!？」

玉座の後方の壁面が割れ、その中に巨大なピラミッド状の建物が現れた。そして、周囲に騒(かさ)された篝火からビーム状に光が集約され、建物の頂点に向かって伸びていった。

「これが謎の答えなのか!？」

「そうじゃないよ。ここまで解明した奴は既にいるんだよ。問題はここからさ」

ガローダが私の言葉を遮(さえぎ)るかのように言葉を被せた。そして、周囲の篝火からの光は建物に集約され、篝火自体の灯りは全て消えてしまった。辺りはすでに真っ暗闇状態になってしまった。

「これでは埒(らち)があかない」

そう言いながら私は光の呪文を唱え始めた。ところが建物側より地鳴りがして何かが崩れる様な音がした。ゴゴゴゴゴゴ・・・

「や、やばいよ!。ちょっと逃げて様子みたほうがいいよ」

躊躇(ちゅうちよ)するガローダを相手にせず、私は光の呪文を唱え終わった。周囲は大きな光に照らされ、目が慣れるまでしばらくかかった。

そして・・・なんと我々が目の前にしたのは一匹の生きた巨大な竜(ドラゴン)であった。

「う、嘘だろ・・・!？」

私は少し口が開いたまま放心状態に陥ってしまった。ドラゴンは深い緑青色で背中には大きなヒレが有り、鋭い眼光で我々の姿を捕らえていた。そして、大きな鋭い歯を持った口をゆっくり開きながら言葉を発したのである。

「■■△○××○×・・・」

言葉とだけ理解できた。しかし我々人間には全く理解できないものであった。その場に居た全ての者は全くどうすればいいのか判らず、立ち往生していた。そしてドラゴンは少しだけ動いたかと思うと己の周囲に火を起こし、その炎を私目掛けて放ってきた。敵とみなされたのだ。

バシッ!

私は生き延びていた。瞬間的に私は投げ飛ばされたのだ。

「お坊さん、奴は敵なんだよ!しっかり!」

マーベラスだ。彼はドラゴンの放つ炎の向きを察知し、私を突き飛ばしてくれたのだ。そして所持していた剣を抜き、睨み続けている緑青竜に向かって構えた。やはり剣士だけに力強くみえる。私が興味を持っただけあって強そうで頼もしいと感じた矢先・・・

「・・・だめだ。逃げよう」

「え?」

格好良く見えた彼から発せられた言葉だった。彼の言葉を聞いた途端に我々も逃げる方法で頭が一杯になった。しかし、竜

は待ってくれなかった。奴は長い尾を巧みに撓(しな)らせ、素早く動きながら竜族独特であろう呪文を唱えはじめた。

「や、やばいよ、やばすぎるよ！」

ガローダはいち早くその場に背を向け、走り抜けた。完全にその場は混乱してしまった。私は連れてきた住民達の安全が最優先とみて、彼らの元へ走り寄ろうとした。その時に、玉座の周囲にあった盾と剣に気がつき、それらを拾いあげた。

「そ、そんな物役に立ちゃしないよ！お坊さん早く逃げないと！」

ガローダが遠くから叫び、住民達も私の姿を見ながら走り去ろうとした。そしてマーベラスもヘッピー腰で少しづつ後ずさりする有様だ。

「あああ、なんて連中だ！これではみんな全滅してしまうぞ」

私がそう言った瞬間に竜の周りから爆炎が発散された。

「うわああああ」

私は反射的に持っていた盾で防御し、我が身を隠した。盾に当たった炎は盾の上で分散され、そのまま周囲の壁目掛けて激突した。

「おお、ぼ、防御できるぞ」

「そ、それじゃ、ま、守ってるだけだからダメじゃ〜ん・・ひーっ」

マーベラスは弱腰だ・・・。

「っていうことは、この剣で闘えばいいのか。しかし私は魔術は使えても剣術はできんし・・・」

ちょっとだけ考えた。そしてマーベラスの方をゆっくりみて、微笑んだ。にやり。

「え・・・？(汗)」

私は有無を言わず、盾と剣を彼目掛けて投げた。彼は驚き「ひーっ、ダメだってば」と言いながらその2つのアイテムを落とした。

「私が援護する。魔術による防御を施してやるから、戦ってくれ。このまま逃げていては全滅してしまうんだぞ！」

「なにやっつてんだよ！あんた達、どうする気だよ。逃げないとやばいんだってば！」

ガローダがまたしても叫んでいる。

「し、しかし・・」

凄んでしまっているマーベラスを後目に私は呪文を唱え始めた。

「水の精霊を司るウンディーネよ、我が魂の叫びが流れによって運ばれたのならば、水壁の柱にて我が身を守り、迫り来る衝撃を受け止めよ・・・オールド・イル・ラ・ウンデナーク・イル・エソラ・・・」

大地が避けて、水流がマーベラスの周囲を取り囲んだ。そして竜が放った炎を飲み込み消化してしまった。そのまま私は同じように呪文を唱え続けた。

「水の精霊を司るウンディーネよ、我が魂の叫びが流れによって運ばれたのならば、流れ出る水にて大きな刃となり、その物の持てる力を捕え・・・ミルド・セイル・ナ・ウンデノール・デル・フリゼ」

彼の持っている剣の周りに螺旋(らせん)を描きながら水が上っていった。そして剣を覆ったかと思うと、それ

は膠着(こうちやく)し固まった。

「ひ、ひーっ」

マーベラスは泣き叫んでいた…。それでも彼に戦ってもらうしかない。私は彼をたきつけた。

「大丈夫だ！。竜の炎は私が封じてある。普通の戦いと同じだと思ってくれ」

「だ、ダメだよ。こんなでかいドラゴンに俺一人で相手なんて出来ないー」

……元々財宝目当てで挑戦してきた剣士とは思えない発言だ。そうこうしてるうちに竜は襲いかかってきた。我々人間の数倍もある腕が大きく振り下ろされ、その勢いだけでも倒されてしまう感だ。

「く、くっそーっ！」

マーベラスは半べそをかきながら竜の動きを避けて、その懐に入ろうとした。そして剣を竜の脇腹めがけて突き刺した。竜は少したじろいだが、これというほどの衝撃もなく、素早く動き始めた。剣がつきささったままマーベラスは、その動きに翻弄(ほんろう)されて振り回された。「ぎゃああああ」

「み、見てはおれんぞ……」

私は浮遊の呪文を唱え、彼を竜から離すべく近寄った。

「相変わらず、情けない坊さんだな」

私の頭上から男の声が聞こえたかと思うと、大きな雷が竜めがけて落ちた。

ドゴゴオ オオオオオオン！

「なに！？」

大きな光と音で何か起こったのか判らない状態がつづいた。そして落雷のショックで周辺は大きな砂(すな)埃(ぼこり)で立ちこめた。そしてその硝煙の中から姿を現したのは彼であった。

「ああ、お前は、あの時のガキ！。いや、黒魔術の若造」

「よお、坊さん。相変わらずしょぼいことやってんなあ」

彼は腕を組み、浮遊しながら私の方へ近づいてきた。周りにいた者達は何が起こっているのか判断出来ず、離れた場所から状況を伺っていた。竜は瓦礫の下敷きになっているが先程の落雷でもまだ生存している様だ。さすがにすごい生命力だが、感心している場合ではない。私は今のうちに竜が身動きとれない様に呪縛呪文を唱え始めた。

「生温(ぬる)いね。そんな呪文では奴はすぐに復活してしまうぞ。古代生物が俺達よりも強い精神力を持っているのは坊さんだったら知ってるはずだろう？」

彼の声に遮られて、私はとまどった。が、とにかくむかつく奴だ。まるで自分ならもっと良い方法で対応出来ると言わんばかりだ。

「今はどちらにしても逃げるのが最優先だ。全滅してしまっただけはここに来た意味がないぞ。奴が噛けないうちに早く退散しなければ」

私はマーベラスの元に寄り、彼を抱き起こしながらガローダや住民達に促した。

「おいおい、もう謎は解けた様なもんだぜ？逃避しちゃったら、せっかくこの場に来た意味がなくなると思うがな。奴こそ謎を解く鍵なんだぞ」

私は彼の言葉を後にマーベラスを抱え、ガローダ達の居る場所まで離れた。しかし、やはり迷った。

「ふん……。しょうがないな、俺が罫を解き明かしてやるよ」

彼はそう言いながら、組んでいた腕を手前に出し、呪文を唱え始めた。いや、これは呪文ではない。今まで聞いたことも無いような言葉をブツブツと唱えながら彼の腕から赤い光が発散した。その光はまるで煙の様に伸びていき、竜の一部に集中した。マーベラスが刃に向かって突き刺した剣である。彼はまるで、その赤い煙を糸を操るように動かした。すると、瓦礫に倒れていた竜が大きな雄叫びを発声した。

ヴァル ロオオオ……！

「なんだ！？こんな魔術は見たこともないぞ！」

私は彼が平静と行っている呪術を見ながら、ハッとした。「古代(エンシェント)破壊(デモリッシュ)系の黒魔術(スベル)か！なんて物をつかうんだ！？」

「さすが坊さん、良く知ってるじゃねーか。だが、別に破壊なんかしねーぞ」

「あ、あ ああ！」

竜は苦しみ藻掻きながら、その姿を変形させていった。次第にそれは複雑な図形を描き、そして収縮していった。そして、まるで刺さっている剣に吸い込まれていった。つい先程まで大きな生物がそこにあったはずが、錆びた剣に吸い込まれ跡形も無く消えてしまった。私は呆然としながら、その光景を目に焼きつけた。そして最後に剣が、カラカラと音をたて地面に落ちた。そこには炎と剣が残っていた。

「よし、こんなもんだな。んまあ剣だけになっちゃったが、とりあえず使える鍵だろうしな。あとは石板の謎だけか……」

まるで彼は全ての事をお見通しであるかのように行動していた。あれ程我々が苦労した難事件を未然に防いだのだ。

- 罨 -

静かだ・・・。何事も無かったかのようだ。全員が呆気にとられていた、その場を混乱に招いた一人を除いて。

「お、おい。何が起こったんだ？」

少し離れて見ていた村人達の1人が声を出して初めて、皆我に返った。互いに凝固した状態が崩れ、自分の周囲をゆっくりと見渡している。誰もが時間の流れに戸惑いを感じていたが、周囲が薄暗く判別出来ない状況で手探りしながら何が起こったのか認識しようと懸命だった。

「こんなパズル解いても俺には興味ねえ事なんだが、この場所には"暴君の錫(しゃく)"があるはず・・・。さっさと済ませちまうか」

彼は周囲の事は興味もないかのように一言吐いた。他の者はうろたえるだけだったが、私はその言葉で意識が彼に集中した。

「おい、お前。なぜここに居るんだ？一体どうやって毫を消したのだ？今の古代(エンシェント)破壊(デモリッシュ)系黒魔術(スベル)をなぜ使えるのだ？」

「あー、うっせえおっさんだな。質問ばかりしやがって。放置！放置！俺は忙しいんだって」

「な・・・なんだと！」

なんだこのムカつく奴は！と思いながら、彼の行動が気になった私は周囲のマーベラスやガローダ、村人達の事を気にもせず彼の動きを探っていた。彼は、私や周りの事に関心なく元居た場所から少し奥に歩み、しばらくするとしゃがみ込んだ。何かをじっと見つめながらブツブツ言っているようだ。気になった私は彼の居る場所に近づいて行こうとしたが、その時。

「マーベラス、しっかりおしよ！いつまで尻餅ついてるんだよ！この根性なし！」

ガローダが声を上げてマーベラスを叱り付けた。彼女は、座っているマーベラスの足を蹴り上げ、そのまま彼を通り過ぎ、奥に見える通路をじっと見つめ、そのまま通路に向かって歩き出した。「さっさと起きて来るんだよ！この等辺僕！」

マーベラスはトホホ顔で起き上がり、さっと歩きながらガローダの後を進んで行った。

「お、おい。お前達何処へ行くんだ？」

私はマーベラスやガローダに気づき、彼らの進んだ遺跡奥に続く通路に目をやった。

「一体、何なのだ。理解できん奴が多すぎるぞ！」

私は癩癩(かんしゃく)を起こしながら、迷った。謎の黒魔術師も気になる、またマーベラス達の進んだ通路の先にある謎も気になる。そうこうしているうちに黒魔術師が立ち上がって右手を身近の壁に向かって騒(かざ)し呪文を唱え始めた。

「ガストレル・アズヴァ・リソ・シアーテ・ナギム・・・」

バァァァン！！

一瞬にして小規模の爆発が起き、私の前にもその衝撃から飛び散った砂塵が舞った。

「うわああ！」

後方から見ていた村人達は改めて驚き、手を合わせ祈りだす者や逃げ出す者が出た。私は彼の唐突な行動に驚きもあったが、自分が僧侶である事も忘れてはいなかった。村人達の安否も大事であると思った私は彼らに遺跡から出て行くように指示した。

「ここは危険だ。すぐに外に出なさい。後は私がくい止める」

村人達は叫びながら逃げたり、青ざめたまま逃げる者も居た。私は、村人全員がその場から離れたのを確認し、すぐに爆発を起こした黒魔術師の動向が気になった。

「(いない!)」

彼は壁を爆破し、その衝撃で出来上がった穴から雲隠れしていた。

「くそっ!勝手なやつだ!何がしたいのだ」

彼の後を追って、その空洞に侵入した私は周囲を見渡しながら、その空洞が人為的に造られた物であるということに気がついた。誰が何の為にこのような空洞として道を作ったのか定かではないが、その中に進入した者として非常に興味をそそられた。

空洞の中は薄暗かったが私の目も次第に慣れ始め、壁つたいに恐る恐る少しづつ前進してみた。「アイツはどこまで進んでいるのだろう・・・」と思案しながら、先に待ち受けている謎に対する期待も膨らんできた。少し進んだところで、小さいながらトラップに出くわし、回避しつつ進んでみた。

「ガローダ・・・。本当にこの先にお宝はあるのだろうか?」

「何をいまさら。これだけの畏だらけの迷宮でお宝の一つもないなんてことあるわけじゃない。いままでこれほどの畏だらけの迷宮に出会ったこともないわさ。絶対にとんでもない財宝とかあるに違いないよ。さっきだってあの坊さんが悪いのさ。あのタイミングで畏を解除すると大仕掛けになるってギルドからの情報を得ていたのにさ、もう少し時間が過ぎればなんてことない畏だったはずなのに」

盗賊二人組が暗闇の中で騒ぎながら歩いている。周囲は石垣にて生成された造りになっており、細い道が幾重にも広がりながら階段にてつながっているのが解る。

「さすがに暗いからなかなか進めないね。松明の一つも持ってからくればよかったよ。あんた何か明るくする物もってないの?」

マーベラスはげんなりした顔で無言のまま両手を広げて成すすべ無しという表現をした。それをみてガローダは溜息をつきながら首を横にふるだけであった。

「仕方がないからこのまま先に進んでみるか・・・」

マーベラスはその言葉を聞いてうんざりしているようだ。彼はあまり財宝探しに乗り気ではない模様だ。

二人がしばらく進むと、いままで細く続いた道が開けて少し大きな広間に出た。その部屋らしきところは外と通じる窓が数点あり若干の光が射している。彼らは目を細めて周囲が薄っすらと判断できる状態であった。

「何だろう、ここ・・・」

さすがに盗賊業が長いだけあって、何か感じるものがある。ガローダは部屋に一步踏み込んだ時点で立ち止まり、周囲を目で伺った。無の空間には窓から吹き込む風の音だけが過ぎ去り、何も変動しない状態に不安感を誘った。しばらくして彼女は身を屈(かが)め、手元に転がる適度な岩石を持ち上げ放り投げてみた。

「また何かトラップがあるはず」

岩は地べたに落ちたが、これといった変化は現れない。

「(この辺りは仕掛けはないのか?)」

ドゴォン！

「ひい！」

二人共驚くどころではない。悲鳴が不完全に出るような声でひきつり、その物体の姿を暗闇の中うまく捉えることもできなかった。暗闇の物体は、巨体であると思われた。それは、その歩行による地響きによって認識できた。

ズウウン！

さすがに二人は危険を察知したのか、留まっていた場所から逃げようとしたが、後方に逃げ場もなく、前にはその物体の影がこちらに向かってくる為、左右に逃げるしかなかった。ガローダは左に、マーベラスは右に飛ぶようにその場を離れ、走り出した。

ガローダが悲鳴をあげた。「うわっ！」

彼女の踏み出した地面が砕け散り、足場がなくなった。この場所はトラップが張られていたようだ。マーベラスは彼女の状態を見どころか、自分が引き腰で逃げることで精一杯のようだ。ガローダは、踏み場の無い状態を回避すべく、飛び跳ねて更に前進し、トラップを回避しようとした。しかし、うまく回避出来ていなかった。

どうっ。

踏み出した足場にあった岩が彼女の腰半分を遮り、逃げようという行動を止めた。

「（まずい！追いつかれる！）」

そう感じた瞬間には既に遅かった。

暗闇の物体は彼女の姿を捉えていた。恐らく、この場にあるべきでないものを認識し、不愉快なものとして攻撃する予定だとしか思えない。

「やられる！」

と声を発した時、彼女の倒れた場所の地面が崩れ、体ごと落下した。

「うわああああ」

叫びながら、彼女は元居た場所から下層の階に岩と共に崩れ落ちた。

「いててて」と言いながらも、さすがは盗賊だけあって危機感だけは忘れていないようで、落ちた場所の周囲を伺いながら逃げようともがいた。そして追いかけてくる暗闇の物体の位置を認識すべく、落ちてしまった上の階の穴を見上げた。

「（いる！）」

暗闇の物体は、穴からその頭部らしき部分が確認できた。まだ危険と察知した彼女は、起き上がって逃げようとした

- 守護の怪物 -

「■○□×○！！」

この世のものとは思えない言葉が頭上から聞こえ、その瞬間、少し生暖かい液体が頭上に降り注いできた。

「え？」

驚きながら、瞬間的に確認する癖によって頭上を見上げた彼女の目に、その液体がかかり、彼女は大声をあげた。

「うわあああああ！」

その液体はまるで塩酸のように熱く、彼女の目認識を奪おうとした。彼女は痛みによって目をつぶり、ナイフを持った腕で目をかばっている。

「おい！そのやつ、大丈夫か？」

今まで聞いたことのない声が聞こえた。しかし彼女は目の痛みがひどく、頭上から聞こえる声を確認するために見上げることにすら出来なかった。彼女はうずくまりながらも、持っていた危機感がまだぬぐえない状態であると思い、その場を去ろうとした。

「動けるのか？少し待っている。そこへいく！」

彼女はその声に驚き、手で押さえた目とは反対側の目で頭上を見ようとした。先ほど、頭上に見えた大きな暗闇の物体の頭部とおぼしきものは既になく、人間の頭と思える影がうっすらと見えた。

「（人だ・・・助かったのか？）」

彼女はそう認識できたのか、その場を逃げようとするのを止めた。

そうしているうちに、頭上の人影がロープを張って自分の目の前に下りてきた。

「大丈夫か？俺は人間だ。なぜミノタウロスが居たんだ？」

「（ミノタウロス！）」

彼女は傷つきながらも、その言葉に驚き傷を負った目を覆っていた手を下ろした。

ミノタウロス、それはこの世では既に神話化した生き物であり、旧王朝時代に繁栄を誇った古代(エンシェント)魔道士(スベラー)達が暗黒面から召還した凶暴といえる物である。姿は人間の部位と似て非なるものがあるが、頭部は闘牛、上腕部は通常の人間とは思えないほどの筋骨隆々で、その後(こ)臀部(でんぶ)には触覚とも思える動きをする尻尾が生えている。知能も通常の人間と同等に備え、動きも俊敏である。このような伝説の生き物が目の前に現実に存在し、現世の人間を襲うなど誰も想像すらしていないはずである。

「怪我はないか？・・・って女か！？こんな場所で何をしているんだ」

先ほどの物体をミノタウロスと伝えた人物はガローダの様子を伺いながら質問してきた。

「いったい、なに？ていうか、あんた誰？」

呆気にとられたのか、その人物は一呼吸置いて、自分の身の回りについた土埃を払いながら説明しはじめた。

「ふむ。そうだな、俺も何が起こったのか知りたいが、聞くにも礼儀ってのが必要だな。これは失礼。俺の名はガンダルア・イノ・アーベ。俗に言う剣士だ」

「剣士・・・あ！マーベラスはどこ！？」

「へ？」

人が話し始めようとしている矢先に、一喝された気分で呆気にとられたガンダルアは、目が点になった。

ガローダは、ガンダルアのことは気にもせず、頭上を見上げて、そのまま元居た場所に戻ろうとした。

「ちょっちょよ・・なんだよ助けたってのに。お礼の言葉もなしか」

呆れながら愚痴っている剣士を無視してガローダは元居た場所から降りているロープで登り、ミノタウロスの残骸を目の辺りにした。

「うわっ、気持ちわりー・・・」

異形の生物独特と思われる匂いが立ち込める中、彼女はマーベラスの逃げた方向へ走った。既に彼の姿はその場には見えず、向かったと思われる通路に侵入してみた。

「あの男、何やってんだか・・・ハァ」

溜息をつきながらも、各所にあるトラップはマーベラスが解除しながら逃げたとみてそそくさと同じ道を走った。案の定トラップと思われる障害は見当たらなかったため、彼女は突き進むことが出来た。

「意外と先に進んだのね・・・。逃げ足だけは速いわ、あの男」

と、彼女が納得している時に前方から声が聞こえた。

「や、やめてくれえ」

マーベラスだ。相変わらず情けない声で悲鳴をあげている。

「トラップに引っかかったようね・・・」

頭を抱えながら彼女は声のする方向へ向かった。そして彼の姿を見つけた。

「あんた・・・何してるの」

「ガ、ガローダ・・助けてくれ」

彼は縄と間違えそうな太い蜘蛛(くも)の糸らしき罠に引っかかってしがき苦しんでいた。

「こんな簡単なトラップにはまるなんて・・・」

ガンダルアは再び頭上の部屋に戻り、横たわる自分が倒したミノタウロスを見つめていた。彼が何故その場にきたのか、またどうやってミノタウロスを倒したのかは不明だが、ミノタウロスが簡単に倒せるような代物ではないというのは誰でもわかる。彼がいかに剣の達人であったとしても、あの短時間で倒すのは何か理由があるはずである。その理由は別機会で行うとして・・・。

彼は思索していた。

「なぜ古代生物のミノタウロスが復活したのだろう・・。それにこの迷宮での出来事だけに、何か要因があるのではないか。そして何か人為的な策略がありそうで気になるな。こんなことが出来るのは、古代(エンシェント)魔術(スベル)に長けた者・・・黒いロープの魔道士か！？ヤツめ、やはりここに居るのか」

横たわるミノタウロスを避けながら彼はガローダやマーベラスが向かったと思われる場所に移動し、その場を離れた。ガン

ダルアも、去った二人が何者で何をしようとしていたのかが気になるのだろう。彼が二人を追った後、屍となったミノタウロスが横たわり、それに窓から射した光が照りつけた。何事も無かったかのように一定時間が過ぎた時、変化が起こった。

「ギィィィ・・・」

不思議なことにミノタウロスが息を吹き返した。恐るべき回復力だ。しかしその頭部は剣で切りつけられた傷が斜めに入り、鼻と思われる部位はただれ落ちようとしている。また、その動きも出現した時点とは異なり、異様に鈍い感じである。その生物は部屋の端に移動し、片腕を伸ばした。奴は置かれていた鉄の縄文(じょうもん)が施された先の太い棒を握り、肩に背負いながら、過ぎ去った三人の進行方向へ進みはじめた。

「古(いにしえ)の法の裁きを記す道が指す方角から来る祈りよ、私の問いに応えその秘めたる力を我が差し向けた標に示せ・・・オレガ・イル・ミ・シサクレン・ワサ・・・」

私は謎の黒魔道士を追っていた。なぜ彼がこの遺跡に居るのか、何を目的としているのかが気になった。既に財宝を求める盗賊の事は脳裏に無かった。黒魔道士が居ると思われる方向に対して風の流れを利用して突き止める方法をとってみた。

「返事が無い・・・。シルフの力をもってしてもその場所を突き止めることが出来ないとは、この迷宮はどれだけ複雑なのだ」

入り組んだ通路の中を彷徨(さまよ)いながら黒魔道士の場所を突き詰めていくと、自分が迷宮の中から出ることすら出来なくなってしまう恐れがある。私のような白魔術師だからこそシルフの力を借りて進むことができるのだが、その力をもってしてもままたらぬとは、よほどこの迷宮は入り組んでいると思われる。かつて似たような迷宮に入ったことがある。しかしその時は私一人ではなく、強者の盗賊(シーク)が同行し彼のトラップ回避にてその謎解明を行ったのであって、今回のパターンとは異なる。このまま進入してしまう事は決して賢明ではない行為だ。

「ヤツに追いつくように急ぎたいが、このままでは解明どころか外に出ることすら出来なくなるぞ・・・どうする」

少し立ち止まり思案した。

「しつこいおっさんだな・・・。いったい何の用だよ。俺は探し物があって忙しいんだがな」

「!!!」

居た!というか、急に現れた。しかも普通の現れ方ではなく、暗闇であるにも関わらずはっきり目視できる。

「貴様、私が訪れた場所に現れては、何かと問題を起こす。いったい何者なんだ!？」

と私が彼に詰め寄ろうとした時、返答してきた。

「何者って・・・そんなこと応える義務もねえな。俺は誰の命令も受けない。世界をこの手に入れる為に、霸王となる為に必要な物を探しているだけさ。坊さんの文句に付き合ってる暇はねーんだよ」

「霸王だと?ふざけるな。この地は偉大なるヂョフ王が統治している。王の統制によって平和は保たれており、小さな争いこそ絶えないが多くの民が平穏無事に暮らせる世の中となっている。それを己が利益だけの為にこの世を震わそうとしているのか!？」

「うだうだうるさいおっさんだな・・・。会う度に説教すんな!」

「お説教ではない!当然の事を言ったまでだ」

黒魔道士は、鼻であしらう様に私を眺めて言った。

「あーだりー……。話してる場合じゃないしな……。邪魔するんだったら、そこでじっとしててもらおうぜ」

と言いながら彼は右手を私に向けながら呪文を唱え始めた。

「！」

私はまた何かされると感じ、即座に身構えて防御の呪文を唱え始めた。

二人の周囲の空気がねじれ、風となり互いの足元の岩盤が少しずつ巻き上がった。互いに呪文が続き、円形に広がりながら巻き上がった岩盤の粉がぶつかり合い始めた。この場は広い空間でもない為に、互いの念じた広がりとはほとんど交差し、それぞれの体にも当たりつつある。

「おっさん、そんな程度じゃ俺には勝てないぜ」

満面に笑み、いや、血走った目で笑いながら黒魔道士は放置していた左腕を横方向に上げた。その瞬間、左手から光の筋が走った。彼はそのまま左手を上に掲げ、勢いよく私に向かって斜めに振り下ろした。

「ぐあぁっ！」

私は驚愕した。何かに縛られる感じがした。先ほどまで発していた呪文は瞬時に消え、体も硬直してしまった。

「き、貴様！またしても……」

「いつも俺の邪魔ばかりするからだ。別に殺すつもりもねえから、そこでじっとしていな。俺は忙しいんだ。あばよ」

「ま、まで！」

私は声だけしか自由にならない。彼は反対方向を向き、そのまま奥の道に入ってしまった。

「また逃げられた！くそっ！」

彼の姿は既に無いが、放たれた私を拘束する呪文の効果は残っていた。私はもがきながら何とか抜け出す為の呪文を思案し唱え始めた。しかし、何度か発してみたものの、何故か呪縛は解かれなかった。

「なぜだ……。いったいヤツは何の呪文を唱えたのだ！？」

私の脳裏には、彼の不敵な笑いだけが響いていた。

- 諜報者 -

この大陸には3つの統治国家が存在する。「クの国」「ナの国」「ラの国」という呼称であり、その中で最も大国なのがこの舞台の場となっている「ラ」の国である。現在「ラ」の国はヂヨフというカリスマが統治し、その国土は大陸の八割以上を占める。過去、この3つの国は均等な国土を保有していたが、ヂヨフの前王クレイドン二世による大陸統一思想による侵攻の時にその均衡は破られ、統一が成される前に崩御したクレイドンに代わりヂヨフがその政権を握ることになった。「ク」「ナ」の両国は、この政権交代に便乗して巻き返すように試みたが、既に「ラ」の国家体制や軍事力は途方もなく巨大化しており、現在の状態の三国の関係を保持するまでとなった。「ク」の王リディウス、「ナ」の女王アリアは共に「ラ」国家の揺るぎを待ち構えながら、その隙を伺っていた。

「衛兵隊長！いずこだ？」

「ナ」の王アリアが叫んだ。

「ここに……。如何なされました？」

「ナ」の国の衛兵隊長と思しき人物が王の玉座前で腰を下げ、王に謁見された。

「この数年、「ラ」の奴らに煮え湯を飲まされながら耐えておる。我が国も過去に比べ国土こそ少ないが豊かな資源と優れた人材に恵まれるようになった。「ク」の国に比べても国力は確かだと思っている。そこでだ……。」

衛兵隊長はその言葉に眉をひそめ、王に向かって見上げた。

「「ク」の国に使者を出し、協定を組む手段を講じてみたい。あわよくば連携し、「ラ」に対して侵攻し、その勢力バランスをこちらに有利にしていきたい。国土が肥大化している「ラ」としては、末端の民への統制もままならず指示命令も迅速に行うことは困難だと想定する。民も必要以上の税に対する不平不満も積もっておるだろう。そろそろ良い時期だと思うのだ」

「陛下の仰(きよ)す言葉の意、解りかねます。確かに我が国も幾ばくかの国力を蓄えてきましたが、これも陛下の良政の下、民の懸命なる努力によって培うことが可能になったと認識しております。ここで大儀の無い戦さを行うと、すべてにおいて逆行する行為ともなり資源も資金も尽き、それこそ徘徊する賊からすれば格好の獲物状態になると考えます。決して陛下のお言葉とは思えませぬ。」

その言葉を聞いた王の側近の者達も同様に感じたのか大きく頷(うなず)くばかりであった。

アリア王は、大きなため息をつきながら声を発した。

「貴公らの言うことはわかる。しかし考えてみてほしい。客観的立場で「ラ」の国の情勢を見て何も感じないか？世(よ)は「ラ」に比べ我が国の情勢は非常に良いと感じる。それは我が国が良いというよりも、「ラ」の国が圧政であることを意味している。自己の生活が安定しておれば良いと思うのは自己中心的発想であって、国を束ねる者としての意識としては適していない。「ラ」の国に住む民を解放することこそ大儀ではないか？その為の神聖なる戦いとして、人民を圧政から解放する戦いとして、大きな意味を持つものだと言えるはずである。それを大儀とせよ」

その場に居る者全員が王の言葉を聞き、互いに顔を見合わせる者や腕を組んで考え込む者、水晶玉を見つめ祈り始める祈祷者、手に持っていた辞書とも思える分厚い本を見開きながら悩む者、など張りつめた空気の中で思案にふけた。

「誰も異を唱える者は居ないようだな。では……」

とアリア王は座っていた玉座からゆっくりと立ち上がり、少し前に出た上で目前にする側近者と呼ばれた衛兵隊長に向かって宣言しようとした。

「「ラ」の国の民を開放する為の聖戦を前提とし、「ク」の国に協力の意を求めよ。その後、互いの国力を武器として精鋭部隊による侵攻を執り行う。異議のある者は前に出よ！」

「(お待ち下さい、陛下)」

その時、玉座の後方の影から声がした。アリア王はその声のする方向に振り返り気味に視線を追いやった。そして影になって周囲から見えない場所に跪く人影を確認して、眉をひそめ、小声で人影に向かってささやいた。

「ぬっ・・・ガンダルアか。いつからそこに居った？」

「(はっ！陛下が先ほどの言葉を発せられる前に既にここに・・・)」

「ふっ、相変わらず剣士としては似合わぬヤツ・・・。まあよい。調査の結果はどうだったのか？」

「(はっ・・・それについては後ほどお伝え致しますが、先に陛下のお耳に入れるべきことがございます)」

そういつつ、人影は玉座の真後ろに素早く移り王だけに聞こえるようにささやいた。「なに!？」

アリア王は驚きながら無言となった。その姿だけが見える側近の者達は、王の動きを見て何が起こったのか不信であった。

「陛下、どうなされましたか？」

「い、いや・・・。何でもない。さ、先ほど申した件については少し待て。改めて伝えるので皆の者、誰にも口外せずに待機しておれ」

衛兵隊長や側近の者達は、不可思議な顔をしながら見つめあった。

「少し一人になりたい。皆の者席を外してくれ」

「し、しかし、陛下」

「よい！下がれ！」

彼らは解せない顔をしながら謁見の間から退いた。王はため息をつきながら再び玉座に座り、言葉を漏らした。

「ガンダルアよ。先ほどの話は真であるな？」

「はい、陛下。私の情報網を利用した結果、「ラ」に動きありと思えます。また、奴らは何か忌まわしき儒教者と関係を持っているようで、その動きも近々表立って見えるのではと思えます。動きが起こる前にその企みを確認し、未然に防ぐ手段を講じなければなりません。先ほどのような「ク」との共同戦線も良いかとは思いますが、「ラ」のことで、単純な戦さの方法で向かってても何か策を練っているかと・・・」

王はその言葉を聞きながら、人影のある玉座後ろに振り返り言った。

「誰も居らぬ。前に出でよ」

「はっ」

人影は謁見の間に素早く動き、王に対して表に向かい、腰を下げた。その男、剣士ガンダルアは、謁見の間にも関わらず重裝備に剣、鎧を所持して接見している。王もそれを容認しているようだ。

「おぬしなら、どうする？」

そう言いながら王は左腕を玉座の肘当て部分に乗せ、自らの頭をささえた。

「おそれながら申し上げますに、まずは更なる調査が必要かと。それも先ほど申し上げた儒教者に関する調査です。この大陸にて信仰されている神はセス、リニアル、マディオの三神のみならず。しかしこれら神に関する信仰とは別に、この地に異教徒が存在するようです。奴らは何を目的としているのか？どこから現れたのか？どれだけの異教徒なのか？を調べることが重要と思われま。なぜならば、この異教徒が「ラ」に関与している可能性が高いからなのです」

「おぬしがそこまではっきり言うのであれば、その情報も確かであろう。改めてその異教徒の調査を行う必要があると思

うが、おぬしに頼んでも大丈夫か？」

「御意。めぼしはついております。すぐに詳細を確認し、ご報告に参ります。しばしお時間を下さいませ」

王は深くうなずき、目をつむった。

ガンダルアはそのまま後ずさりし、謁見の間から消えた。

- 怪物再び -

「さ、いくよ。またあんな化け物に出会ったらロクなことはないからね」

ガローダはそう言いながら罾から開放されたマーベラスの肩を叩いて先へ進もうとした。マーベラスはバツの悪い顔をしながらその後を付いていった。

「しかし、いったいこの遺跡は何なんだろうね・・・」

「本当に宝なんてあるのかな？さっきから罾ばかりで宝の"た"の字も現れないんだがなあ」

「お宝探しはそんなに簡単じゃないよ。難しいから楽しいんじゃない」

「そんなものかなあ・・・」

さすがに乗り気でないのか、マーベラスは気の無い返事でしかない。そんなマーベラスの様子を無視して、ガローダは楽しげに足を進めた。

少し進んだところでガローダは立ち止まった。それにつられてマーベラスも立ち止まり彼女に向かって言った。

「何か出た？」

「いや・・・そうじゃなくて、何か聞こえない？」

不思議そうにマーベラスは耳をすましてみた。また化け物が出てこないか気になりながら眉をひそめた。
シィィィィ・・・。確かに何か聞こえる。

「水が流れる音っぽいなあ・・・」

「水脈がある！ってことはさ、どこか外から流れてきている水路か川があるんだよ」

「川？こんな遺跡に？」

「川かどうかは解らないけど、水路はあってもおかしくないよ。遺跡ってことは昔誰かが住んでいたわけだし、人為的に水路を作っておくのは有り得るね」

なるほどというような感じでマーベラスが目を大きく開いた。

「でも、水路があったとして、宝にどう関係があるんだよ？」

「わからない男だねえ・・・水が流れているってことは、その経路には住居があったってことじゃない。住居があったということは人が居たってこと。つまり何か物があるってつながるじゃない」

マーベラスは手を叩きながら再びなるほどという顔をした。

ガローダは目をつぶりながら耳をすまして音の聞こえる方角を探った。そして目を開き、その音のする方に向かって歩き出した。マーベラスも彼女が歩き出すと、その後をついていった。

「さすがに暗いから歩きにくいね・・・。しかも足場に岩だらけでつまずいちゃうよ」

「でも明かりは持ってないから仕方が無いよ。少しずつ進むしか」

と話している間に後方から声がした。

「おーい。女あ。どこまで行ったんだあ？」

ガローダとマーベラスは足を止め、後に振り向いて目を細めた。その視野の先に人影が見えた。甲冑に身をまとった男が松明を持ちながらこちらに向かってくる。

「あ、さっきの変なやつ。」

「知り合いかい？松明もってそうだし丁度良かったじゃん」

「知り合っていうか、さっき化け物から逃げた時に出会ったんだけど」

と彼女が言った時に、マーベラスは顔色が青ざめた。

「そ、そういえば、さっきの化け物はどうなったんだ!？」

ガローダは呆れた感じで返答した。

「忘れてたの?・・・ハァ。私も穴に落ちちゃって何がどうなったのか解らないんだけど、あの男が現れて、穴から出たら化け物は倒れてて」

「てことは、あの人が化け物を退治しちゃったんだ。すげー」

ガローダには、この場に存在する男二人が剣士という同じ職業とはとても思えなく、再びため息をついた。そうしているうちに光が彼らに追いつき、ガンダルアが合流した。

「よくこの暗闇の中、明かりも無く進めるねえ」

とガンダルアがにこにこしながら言った。

「あんた何者?っていうか、なんで私たちに関わるわけ？」

ガンダルアはその台詞を聞いて目が点になりながら返答した。

「何者って・・・さっき説明しようとしたら、あんたが無視したんじゃないか。勝手な人だなあ。俺の名はガンダルア・イノ・アーベ。旅の剣士さ」

「剣士さんが何でこんな遺跡に居るわけ？」

「人を探してる。魔術師なんだが黒いローブを身にまとっていて・・・あんたら見たことないか？」

ガローダとマーベラスは顔を見合わせながら互いに首を振った。

「知らないか・・・。この遺跡に入った姿を見た者が居たらしいんだが、他の場所に居るってことか・・・」

マーベラスが思いついたように言った。

「あ、あの坊さんじゃない？」

「馬鹿だねえ。あの人はローブなんか着てなかったじゃない。いかにも坊主って感じの格好だったし」

「あ、そうか。んじゃあ解らないなあ」

そう言うとき持っていた盾を地につけて回し始めた。

「あ!さっきの魔術師じゃない?ほら、ドラゴンやっつけちゃった」

「あああ」と首を縦に振りながらマーベラスが盾を回すのを止めた。

ガンダルアはそれを聞いて反応した。

「知っているのか！？そいつは黒いローブだったか？」

ガローダとマーベラスは「黒？」と同時に言いながら眉をひそめた。

「黒っていうか、そういえばローブも無かったような・・・」

「違う人か・・・。ヤツめ、どこに行ったんだ！」

「でも、その魔術師、すごいやつだったよ。呪文バンバン唱えてドラゴン倒すし、爆発起こしてどっか行っちゃうし」

ガンダルアはそれを聞いて、求める黒いローブの魔術師の像と脳裏でダブらせてみたが、少しイメージと異なるようだった。

「ヤツはそんなに派手な事をする感じではないな・・・。別人か」

「他にこの遺跡で人は見ていないよ。この辺の住民達は別だけど魔術師なんて居なかったし」

ガンダルアは、道の奥をじっと見ながら何か考えていた。

「ところでさ、あたし達はこの遺跡のお宝を探しに来ただけど、明かりがなくて困っていたのよね。丁度いい具合にあんたが現れたってわけ。お互い何か探してるっていう目的は同じだし、行動を共にしない？」

ガローダがそう言うと、ガンダルアは少し考え返答した。

「わかった。シーフと行動を共にするのは、こういったトラップだらけの場所では効果的だし、互いに利もあるだろう。どうする？このまま先に進むか？」

「そうだね。もともとあたし達がこの道を歩いて来たんだし、そのまま進むっきゃないね」

マーベラスも助けが増えたとみて、うんうんと何度も首を振った。女盗賊と二人の剣士一行は、互いの目的の為に先に進み始めた。

ドン！！

彼らの居た位置の真横の壁が爆発し砂塵が舞った。

「なっ！」

3人共驚愕した。見覚えのある巨体の物陰が目の前に現れた。

「ミノ・・・タウロス。死んじゃいなかったのかい！？」

ガローダは裏返った声でそう言い、足を一歩引いた。驚きながらもマーベラスは盾を身構えて逃げ場を探した。そして化け物の横をすり抜けて逃げようと走った。

グァシッ！

鈍い音とともにマーベラスの体が宙に舞い、そのまま地面に叩きつけられた。

「ぐはあっ！」

彼は嗚咽を吐きながらその場に倒れてうずくまっている。

「マーベラス！大丈夫！？」

ガローダは彼の元へ走り、その安否を確認した。その二人を見て化け物はズシンと地響きを鳴らしながらゆっくり歩み寄った。察知したガンダルアは即座に懐から大剣を抜き化け物に向かって対峙した。

「さすがは古代の化け物だけあって、一刀両断とはいかなかったか！今度こそしとめる！」

そう言った直後にガンダルアは剣を大きく振りかぶった。そうすると彼の腕から大きな光がほとぼしり次第に剣の先まで広がった。

「えいやっ！」と叫び、彼の剣が振り下ろされ、化け物めがけて刃が落ちた。それと共に剣に帯びていた光が強力な刃のように伸び突き刺さった。化け物は光が突き刺さった左腕部の振動によって後ずさりし、よろめいた。

「やったか！？」

ガンダルアはその一撃によって化け物の動きを見定め、倒れたマーベラスやガローダに目をやり、その安否を伺った。彼らは倒れたまま化け物の動きを見ていた。

「逃げろ！」

ガンダルアはそう二人に叫び、再び化け物の息の根を止める為に剣を身構えた。化け物は傷ついた腕を押さえるわけでもなく、再び体制を戻してガンダルア目掛けて大きな雄たけびを発した。

- 暗躍する黒 -

無音だ。謎の黒魔道士の呪縛によって拘束された私は身動きが取れなくなっていた。呪文を放った者が既にそこに居ないにも関わらず、その呪縛が解けないという事は、呪術者その者の精神力がその魔力に反映し、強力な保持がかかっていることになる。私も過去からの鍛錬によって白魔術を身に付け、それなりの技能を発揮できると自負していた。しかし、それ以上の強力な力によってねじ伏せられた場合は簡単に制御することは出来ない。それほどにヤツの魔力は強いということを身をもって知らされた。

「私も僧侶の端くれ。じたばたしても始まらぬ。まずは精神の統一をせねばな。それにしてもヤツはどこへ消えたか・・・。それにこの遺跡に何を求めて参ったのか・・・」

そう思案する時間が過ぎた。無音が続き、周囲の状況がわからぬまま時間だけが過ぎた。私は自己の周囲の認識が必要と思ひ、呪文を唱え始めた。光の妖精の力を借り、この場の状態は見えるようになった。ただひたすら長く続く道の中で、生息する蝙蝠の残した残骸や鍾乳洞化した水晶らしき物体が私が放った光を反射しキラキラと輝くだけであった。

「白魔術か・・・。魔力もそこそこと見える。罨にはまったのか？」

急に目の前に黒装束の老人が現れ、私は驚いた。先ほどまでその気配すらなかったし、それに気づくことさえなかった。少なくともそれなりの鍛錬は行ってきた私だが、まったく気配に気づかず近づかれたのには驚きだ。

「驚かせたようだな。そうだ。私も魔術師。おぬしとは異なる属性ではあるが、この程度のまやかしは出来る。何があったかは知らぬが、奇妙な罨にはまっておるな。それも魔力は大きいと見える」

私を感じたそのままを見抜いたことに驚いた。この老人は危険だと私の直感が訴えた。

「貴方は何者だ？」

「言ったとおりの術師。おぬしのその不恰好(ぶかっこう)さに興味があって出てきただけ」

「ちっ！ぬかしやがる」

「まあ待て。おぬしとやり合うつもりはない。わしが興味があるのはおぬしにかけられたその術じゃ」

不気味だ。今まで感じたことの無い憤りを感じる。私の直感がそう伝えている。私は言葉を発することが出来ないままこの老人の動きを伺った。

「まあ良い。わしが開放してやろう」

といいつつ、その老人は片手を黒いローブの間から出し、呪文を唱え始めた。

「(なんだ？この気味悪さはいったい・・・)」

私はそう思いながらも呪縛故に身動きがとれず、身を任せた。

老人の発した呪文は私の知らないものであった。言葉ともとれず、発せられたという感覚もなく、まるで時間が急に途切れたかのように効果が現れた。私の体の周りにはかけられていた呪縛は一瞬にして無くなり、その力によって固定されていた私の体は一気に力が抜けた状態となり、その場に倒れこんでしまった。

ドサッ

「誰に今の呪縛術をかけられたのか教えてくれ。わしが聞きたいのはそれだけじゃ」

老人の質問に戸惑った。あの黒魔道士とどう関わっているのか、あの魔道士のことさえよく解らない私としては、この不気味な老人の質問に気安く答えることができなかった。

「開放してくれた事には感謝する。しかしそうしてくれと頼んだわけでもない。質問の意味も解らぬし答えようが無い」

「坊主にしては礼儀を知らぬようだな。おぬしもわからぬわけでもあるまい。おぬし程度の力ではわしにかなわぬという事を」

凶星だ。この老人何者だ！？という疑惑が脳裏を駆け巡った。体が自由に動くようになったにも関わらず、妙な緊張感によって束縛されている感じがした。

「どうしても答えぬのならそれでも良い。わしも先を急ぐ。おぬしに興味はない」

その台詞を最後に、一瞬にして老人が消えた。

「！」

この迷宮に入ってからというもの、妙な奴らが多すぎる・・・。しかし、滅茶苦茶をしながらも盗賊達や若い黒魔道士からは、老魔術師のような気配を感じなかった。なぜか私は老人との接触によって彼らが危険にさらされると感じ心配になってしまった。

「彼らを追わねば！」

それが間違いの始まりだった。

- 黒と黒、破壊と破滅 -

「またはずれかよ・・・どこに有りやがるんだ、畜生。」

黒魔道士は広間に居た。彼は文句を言いながら何かを探していた。

「このままだと何日もかかっちゃうな・・・いつまでもこんな薄暗い迷宮に居たくねえし、先に他の"聖典"を探したほうがよかったな。さて、この後どうするか・・・」

彼は腕を組みながら立ち尽くしている。彼が魔術を使ったのか、広間には明かりが射しており、そこに所在する物は識別出来るようだ。しばらく経って彼は歩き始めた。広間の装飾品を手にとってみては、地面に投げ捨てた。彼は諦めたのか、広間から出て行こうとした時に後方から声がした。

「ここに居ったか。おぬし黒の使い手だな？」

気が付いた彼は振り向いて答えた。

「誰だ、てめえ？胡散臭い爺さんに知り合いはいねえぞ。それに用もねえ」

「おまえに用が無くとも、わしには用ありじゃ。言うとおりにすればよし、せねば死んでもらうまでじゃ」

そう言いながら老人は黒魔道士に近寄ってきた。

「馬鹿じゃねーか？俺に勝てるとでも思ってんのか？舐めんじゃねえ！」

そう彼が言った途端に、彼の身から大きな炎が発せられ、そのまま老人に向かって伸びていった。

「ほう」

老人は驚いた感もなく、その場を動かさず片手をローブから出した。

シュンッ

老人を覆うかのように地面から岩盤が板状にそそり立ち、四方の障壁となって炎をバリアーした。その姿を見て黒魔道士もニヤリとしながら言った。

「やるじゃねえか。ふふん。同じ黒か。老いぼれに負けるほど柔じゃないぜ！」

彼は両手を上に挙げながら呪文を唱え始めた。それを見ても老人は驚きさえしていない。

「ふん・・・ソドムか。嘆かわしいのお」

呪文を唱え終わるかどうかの瞬間に両手を振り下ろし、攻撃に転じた。どこから発生したのか解らない稲光が老人に向かって落下し、その体を直撃した。老人の体は光に包まれたが、微動だにせず光が消えた瞬間に何事も無かったかのように仁王立ちしていた。

「ちっ！やるなジジイ」

互いに位置を変えず、魔法による攻防が続く。両者共これといった外傷もなく、周囲の壁や飾り、道の形状だけが変化していった。

「そろそろ終わりだ。おぬしの精神力ももつまい」

「（やる！この爺さん強ええぞ・・・）」

老人は片目を大きく開いた。するとその手の周りから奇妙な黒い光の輪が広がり、何重にも出来上がった。そしてそのまま

輪は黒魔道士の方向目掛けて飛び散りった。

「ちっ！」

黒魔道士は位置していた場所から飛び出し、斜め前方に転がった。そして反転しつつ呪文を唱え攻撃に転じた。黒魔道士の放った攻撃の波動は老人目掛けて飛び、老人を保護していた岩盤を砕いた。

「甘い・・・」

そう老人は言い、拳げていた腕の指を少しだけ曲げた。すると、先ほど投げた輪が黒魔道士の後方から迫った。黒魔道士はそれに気づいているようでもない。そして、輪の1つが黒魔道士の足首に絡みついた。

「なに！」

黒魔道士は驚き自分の足元を見た。彼はこの不思議な輪によって足の動きを固定されてしまった。その輪は瞬時に分散し、足から上半身にかけて広がっていき、彼の体を軋めた。

「ぐわああああ！！」

彼は奇声をあげながら白目になっている。

「おぬしごときにやられる程老いぼれてはおらん。舐めた真似ばかりしよって・・・おぬし何者だ？なぜこの遺跡を調べている？」

そう老人に言われ、苦しみながらも黒魔道士は答えた。

「うがあ・・・うるせえ・・・お前に話す・・・口は・・・用意してない・・・なんだよ！！」

「まだ暴れる力が残っているのか・・・大上際の悪いヤツだ。いいだろう、所詮邪魔なだけだ。すぐに消してやる」

老人はそう言いながら少し前に出てきた。そして、その場で手のひらを上に翳し、呪文を唱え始めた。すると手のひらの上の空間に小さい黒い玉が現れた。その玉の周囲には空気がよどみ、回転しながら周囲の空気をその内部に引き寄せていた。そしてそのまま黒い玉は巨大化していき、老人の体と同じくらいのサイズになって止まった。

「て・・・てめえ・・・亜空間に放り・・・出すつもりか・・・」

苦しみながら黒魔道士が言った。同じ魔術の使い手として、その技を認識しているようだ。

「いかにも・・・。おぬしのような輩は、消滅せぬ限り復活するはず。であれば、この場から遠ざけるのが得策。邪魔なのだよ」

そう言うと黒い玉は黒魔道士に向かって飛んだ。

「なめんじゃ・・・ねえええ！！！！」

そう叫んだ黒魔道士の体から大きな炎が発生し、周囲へ飛び散った。そして彼の体を縛っていた黒い輪を消滅させ、黒い玉をはじき返した。黒い玉は消滅した。

「なに！？」

老人は先ほど見せていた澄ました顔ではなく目を大きく見開き、その状態に驚いた。

「ぐえっへっへっ・・・」

黒魔道士は片目をあけながら、奇妙な笑い方をした。

「この程度のことで俺はやられたりしねえぞ。その辺の魔術師と同じにするんじゃ・・・ねえ！」

そう彼が言った途端に大きな風がその場に巻き起こった。老人は腕で顔をかばいながら、その風圧を遮った。

「おもしろい……。この地にもそれなりに力のあるヤツが居たとは」

「それなりだとお？馬鹿にすんじゃねえ！俺様はこの世の霸王になるのだ！ガァッハッハッハッ」

「霸王とな……。大きく出たな。まあよい。おぬしとの勝負はお預けた。なかなか楽しませてくれるのお。おぬし、イーグレックの錫杖を探しておるのではないか？ならば見つけることは不可能。なぜならばわしが先に見つけ去るからな」

「！」

黒魔道士は目を見開いて驚愕した。見抜かれている！この遺跡に所在する聖典の1つである杖を求めて来たのは自分だけではなかったと思った。

「てんめえええええ……。やっぱり生かしておけねえ。あれは俺のものだ！」

怒りながら黒魔道士は両手を上げ、呪文を唱え始めた。

「同じことの繰り返しはつまらぬ。おぬしと遊んでいる余裕はないのだ。さらばだ」

そう老人が言ったかと思うと、彼の足元に黒い矩形の線が走り、魔方陣が描かれた。その魔方陣から光が上方に程走り、老人の体を包み隠した。

「待て！」

黒魔道士がそう叫んだ時には老人の姿は無かった。

「何者だ……。くそじじいめ……」

- 逃げる -

「■■○○△×■△！！」

ミノタウロスは大きく口を開けながら叫び、持っていた棍棒を振り上げた。

「こん畜生！」

化け物に一撃を与えた後にも関わらずその勢いに圧倒されながら、ガンダルアは両手で大剣を握り締め構えた。化け物が手にした棍棒が空気をビュッと鳴らしながら振り下ろされた。彼は素早くかわしてから飛び跳ねて位置を変えた。甲冑を身に纏っているにも関わらず軽快な動きである。化け物が振り下ろした棍棒はガンダルアが元居た場所の岩場を削り取り、その岩の破片が周囲を舞った。

「ライトニングソードでも一時的にしか倒せないとなると、ある意味ゾンビみたいなもんだな・・・。ということは」

ガンダルアはそう言って、ニヤリとした。

「逃げよう！」

ガローダとマーベラスは化け物から少し離れていたが、その勢いが強烈だった為逃げるタイミングを失っていた。そうしている間にも化け物は棍棒を振り乱しながらガンダルアに牽制し、周囲の岩場を壊し続けている。マーベラスは剣を腰につけたまま盾を自分の前に突き出しながら腰が引けている。ガローダは手持ちのエッジナイフを構えながら、化け物がこちらに向かって来ないか気になっていた。化け物は小刻みに逃げ回るガンダルアに気が取られているようであった。これ幸いと思ったガローダはマーベラスに対して指でつついた。

「(逃げるよ)」

「え？だけど、あの剣士が戦ってるじゃん」

「あの人は強いからいいんだよ。こっちはあんな化け物と戦えるほど余裕はないんだよ。あんただって戦いたくないだろ」

首を大きく縦に振りうなずきながらマーベラスも逃げる体制だ。ガンダルアは近くにあった岩を片手で拾い上げ、化け物から見て自分とは逆の方向に投げつけた。その瞬間、化け物は岩に目をやった。

「(よし！)」

そう心で念じ、即座に化け物の視線の反対方向に周り、そのまま走り抜けた。化け物は棍棒を振り回し、ガンダルアの走り抜けた道の壁を切り裂いた。ガンダルアの足は速かった。ミノタウロスは立ち往生し、少ししてから追いかけるように歩き始めた。

ガローダとマーベラスは走っていた。後ろを振り向いては追いかけられると思ったのか、がむしゃらに走った。道がしばらく続いたが、先に少し明るい感じがした。

「出口よ！」

そう彼女が言った途端に、マーベラスが今まで以上に早い速度で走ってガローダを抜き去った。

「・・・あの・・・ばか」

マーベラスは出口に辿り着いた。そして出口を出た所で慌てた。

「うひっ！」

ガローダが追いついた。

「何？どうしたの？」

出口を出たところは大きな岸壁になっていて、下はまったく見えないほど道が無くなっていた。

「行き止まり・・・」

「ど、どうしよう」

ガローダは周りを見渡したが、これといった逃げ道は無さそうだ。

「まずいね・・・。あの化け物追いついてきちゃうよ」

「少し戻って他の道を探すしかないよ。急いで戻ろう！」

そうマーベラスは言いながら、走り出した。

「化け物とまた鉢合わせにならないように祈るよ・・・」

ガローダも道を戻り始めた。

少し戻った辺りで道が湾曲していた。

ガツンッ！

「うわ！」

「なんだ！？」

二人の男の甲冑が互いに当たって鈍い音がした。そして、マーベラスは尻餅をついてしまった。

「ここに居たのか。道は間違えていなかったようだな」

ガンダルアだ。同じように逃げてきたらしい。

「間違えてるよ！この道は間違えてるんだよ！」

マーベラスは焦りながらしどろもどろで反応した。

ガローダもそこに追いついてきた。

「あ、あんた生きていたのかい」

「おまえら、逃げるにしても先に行き過ぎだぞ・・・。松明が必要だったんじゃないのか？無くても充分行動出来るじゃないか・・・」

「そんなこと言ってる場合じゃないんだよ！この先の道は出口があるけど、そこから道は一切ないんだよ。岸壁になっていて行き場がないんだよ！」

すごい早口でしゃべる彼女にガンダルアは冷静であった。

「そうなのか。ということは、またしてもあの化け物と戦うしかないのか」

「戦うって、あんたさっきみたいに倒せるのかい？苦戦してたじゃない」

彼女は、なんだか少しヒステリックになっている。なっても仕方が無いであろう。あれだけの化け物に追いかけてパニックにならない者は普通ではないはずだ。

「まあ、おちつけ。俺がなんとかする。さすがにミノタウロスと戦った経験は今日が初めてだが、たまたまヤツにはあの回復力があってただけだ。その回復力も、そう何度も効きはしまい」

「っていっても、あんた一人で戦うなんて・・・」

「剣士ならもう一人居るじゃないか」

二人揃って、そこに居るひ弱そうな男に目をやった。

「え？・・・ま、またまた、ご冗談を」

マーベラスはたじたじとしている。

「あんた少しは戦うって思わないわけ？剣士なんでしょうが」

「そ、そうだけど、今まで人間は相手にしたけど、怪物なんて相手にしたことはないってば。それに、逃げろってさっきから言ってきたのはガローダのほうじゃないか」

マーベラスはガローダに向かって食って掛かった。

「〇〇△■×〇■〇△！！」

奇声を発して恐れていた化け物がガンダルアの真後ろから姿を現した。

「って・・・来たか！」

と言いながらガンダルアは屈みながら反転し腰の剣に手をやった。

「ま、まずいよ！勝てるの！？」

「あんたは下がっている、女。そこの兄ちゃん、出番だぞ！」

ガンダルアはマーベラスを焚き付けて、剣を抜いて構えた。マーベラスは、同じように剣を抜き、盾を前に翳した。その時・・・。

「〇■×！」

化け物の動きが鈍い。急に何かに矯正されたかのように動作が遅く、まるで時間の流れが止まっているかのように見えた。

「ど、どうなっているんだ？」

三人共あっけにとられたまま、その位置を動くことが出来なかった。ゆっくり、ゆっくりと襲ってくるような格好をしては居るのだが、あまりにその動作が鈍く滑稽に見えた。その為はどう攻撃や防御に転じればいいのか解らなかった。

「間に合ったようだな」

どこかで聞いた声が出て、暗かった道が急に明るくなり始めた。それは松明などの自然による光ではなく人為的に作られたようであった。

「あ、お坊さん！追いかけてきたんだね」

ガローダは私の姿を見つけ、そう言った。私は事の次第を説明した。

「奇妙な魔術師を追っていたが、お前たちの安否が気になったので、道に戻って追いかけてきたのだ。声が近づいてきたと思ったが、人というより動物のような声だったので、その声をたどってきたら、お前たちがこの化け物に襲われていたというわけだ」

「で、でもこの化け物、おかしいんだよ。さっきまですごい勢いで襲ってきていたのに、急に鈍くなっちゃって」

マーベラスが舌をかみながら説明すると、私はその理由を伝えた。

「案ずるな。私が術で動きを封じたのだ。こやつ周りの空間だけ我々が感じている通常的时间より数倍遅くなっている。こやつにして見れば、お前達の動きが光の速度のように見えてしまう。ある意味、魔法で互いの空間がねじれた状態を作り上げたのだから、それぞれに領分を侵すことは不可能だ。つまり、こやつがお前達を攻撃することが出来ない分、お前達も攻撃は出来ないということだ」

へえ。というような不可思議な顔をしながらガローダとマーベラスが私の話を聞いている。不思議ではあるが、攻撃されないということで安心したようだ。

そんな話にはあまり関心がないのか、ガンダルアは化け物の後方を見つめ、歩き出した。

「坊さんの呪文が解けないうちに、この場を離れたほうがいい。これ以上、罨や化け物に手間がかかっているのは互いの目的を達成できないだろう？」

彼は松明に火をつけた。

「そうだね。逃げるが勝ちさね。こんちくしょうめ！」

ガローダはそういいながら、不動の様に見えるミノタウロスを手で蹴飛ばして、その後方に続く道に戻り始めた。マーベラスは奇妙な顔をしながら化け物を目で追ひ、ガローダの後をついていった。

「あの御仁は誰だ？先ほどまで彼らと一緒にいたとは記憶にないが・・・。それに、あっちの剣士とは物腰も違うな。何か裏がありそうな気がしてきたわい。先ほどの老魔術師といい、妙な黒魔道士といい、あの剣士といい・・・何者だ？」

私はそうつぶやきながら、ミノタウロスを背に彼らの進行する道を歩き始めた。この怪物もしばらくは私が掛けた呪縛で動けまい。

互いに思いを秘めながら4人は行動を共にすることになった。

- 謎の広間 -

遺跡の中心部には円形に広がる太い石柱が連立する空間があった。どういう仕組みか解らないが、天井が吹き抜けになっており柱の先端部には大きな四角い岩が乗っており、それと同様の大きさの平たい岩が各柱から対角線を引いた中心部の上空に浮かんでいた。

「あそこか……。このような場所にあるとは、くだらぬ知恵をつけた者達の悪戯(いたずら)か」

そう言って老魔術師は柱に向かって歩き出した。先ほどまでその老体に合った速度で移動していたはずが、柱部に差し掛かった時に少し早く歩き、そのまま柱の高さ中心くらいまで飛びつき、そのまま何度か足場を見つけたのか跳ねるように上へ上へっていった。

柱の天井部に辿り着いた老人は、中心に見える平たい岩部を見つめ、眉をひそめた。そしてそのまま何かを確認したかのようについに呪文を唱え始めた。

「セムレテ・ガウ・クウボルト・イシタール・アガメム・ノエギリ・ステ……」

空に暗雲がさしてきた。そして上空を包みながら、雨を生成し降らせ、稲光を発した。そのまま光は落雷となり、老人が立つ柱以外の柱の先端に取り付けられた岩に同時につながった。瞬間、大きな音がした。

何かスイッチが入ったかのように、中心部に存在していた平たい岩がゆっくりと落下していった。まるで機械に制御されているかのようだ。そしてその岩は地面に降りると共にズシンという音を立てて固定された。

「さてと……」

小声で老人は言う、自らの体を柱の先端から投げ捨てるように落とした。普通であれば、落下すると速度が上がるものだが、この場においては自然の摂理は適応しないようだ。彼は一定と思える速度でフワッと落下し、その場の中心に落ちた岩場の上に舞い降りた。そして、その周囲を見つめた。岩場の中心には大きな棺(ひっか)らしき箱が設置されている。箱の周りには6ヶ所小さな柱があり、その支柱の上端に球状のクリスタルが施されている。少し離れた場所から老人はそのクリスタルを目で見渡した。

「悪戯(いたずら)が好きなやつらよの……。手間ばかりかけさせよって」

そう言いながら老人は歩み寄り、ロープから片手を出してクリスタルの一つに騒(かさ)した。すると、クリスタルの中心から小さな光が発せられた。老人はそのまま、別のクリスタルの場所に移動し同様に手を騒(かさ)した。その瞬間、クリスタルから手に向かって電気の発散のような筋が数本発散された。

ビリビリリ！

老人は、驚いたのか手の接触をやめた。すると最初に光を発したクリスタルから光が消えた。

「ふん……。またしても無駄なことを」

何かトリックがあるようだ。簡単に仕掛け(トラップ)をはずすことができない為に、老人は舌打ちをしながら静止した。

「足りぬのか……。またしても探し物をせねばならぬとは」

再び老人の姿が瞬時に消えた。

しばらくこの空間に静けさが戻った。外と通じるこの空間は周囲に光も照らされ、その殺風景さが目立った。そこに所在するのは出入り口と大きく周囲を取り巻く柱、その中核位置にある棺1つ、外に通じている場所だけに鳥の巣らしきものや、広間の端々に散乱する残骸だけであった。過去誰も訪れていないのを証明するかのように、その痕跡(こんせき)すら見えない。先ほど老人が上空に浮かぶ岩場の位置を変えて、初めて何か動きがあったといえる。再び老人が居なくなったこの空間は、過去と同じ時間を刻み始めた。

- 不思議のオブジェ -

「おかしいんじゃない？今までこんなもの見たことも無いよ」

ガローダが不機嫌そうに言った。彼女は目の前にある三角錐状のオブジェに向かって手持ちのナイフを引っかいたり、擦(す)ったりしてその中身を取り出そうともがいていた。しかし彼女が今まで見てきたトラップのかかった宝箱とは少し異なる施錠なのか、手をこまねいていた。

「そんなもの放っておいて先に行くぞ」

ガンダルアはこの場に目的とするものはないと言わんばかりに、立ち去ろうとした。しかしガローダが執拗(しつよう)にオブジェに向かって開錠している為に、4人はこの場を動くことができなかった。

「あたしの勘が当たってるはず。この中に何かあるよ」

盗賊の勘だから本当に何かあるという確証があるわけではない。今まで進入を制御されるようなトラップばかりだったために、しきりに彼女はこの遺跡に眠るお宝がどこかにあるはずと探し始めたのだ。彼女がこのオブジェに気を取られている姿をみて、マーベラスも剣で叩いたり、盾をぶつけてみたりして外壁をつぶそうとしたが、外見とは異なり意外と硬く出来上がっていた。

ガンガンッ！ゴツゴツ！

二人で一つの物に八つ当たりしているようで、その姿は滑稽(こっけい)であった。

「だ、だめだ・・・ハアハア。びくともしないよ。本当に何か入ってるんだろうか？」

「あるってば、絶対。あたしの勘は外れたことはない！」

そうガローダに言われて「(外れてばかりのくせに・・・)」とマーベラスは心で叫んだ。

「俺は先を急ぐんだ。お前ら、まだかかるんだったら放って行くぞ」

ガンダルアはいい加減にしろというように二人に背を向けてその場から出ようとしている。

「私も同じだ。先にいくぞ。早く来ないとまた暗い道をたどることになるぞ」

私がそう言っても、二人はまだやっている。呆れた私は、先にこの場から出て行ったガンダルアを追いかけて同じ道に入った。

「も、もうすこし・・・」

ナイフをオブジェに引っ掛けながら力いっぱい開けようとしている彼女は、私の声にもせずに苦しそうな声を出していた。

ガンダルアや私とその場から居なくなっただけで、物音がした。

バタンッ！

その場の岩板が倒れ、道が開いた。そしてその道から人影が見えた。気が付いたマーベラスはその音が鳴った方向を振り向いて驚いた。

シィィィィ！

何匹いるのか良くわからない。人かと思ったがそうではない。白目をむいてその生き物は涎(よだれ)を垂らしながら二人の居る場所に向かって奇声を発して走り出した。

「お・・オークだ！！やばいい！」

そうマーベラスが言った時点で既にオークはマーベラスの体に突進し、彼を投げ飛ばした。

「ううう！」

連れが急に飛ばされて、初めてガローダがその状況に気が付いた。

「な！なんだよ、おまえら！？」

そう言うのが早いか、彼女は先ほどまでオブジェに挟んでいたナイフをはずし、構えた。オークは大群で彼女目掛けて飛び出してきた。彼女は避けながらナイフを振り回し、オークの一匹に傷を負わせた。そのオークは肩部を切り裂かれ、人間とは全く異なる色をした血のしぶきを迸(ほとばし)らせた。オークは再び奇声をあげて怯(ひる)んだ。しかし、他のオークは怯むことも無く彼女に向かって襲い掛かった。

「(やられる!)」

マーベラスは、倒れたまま蹲(うずくま)っている。甲冑を身に纏(まと)っているとはいえ、かなり不意打ちを食らったようで痛みを耐えながら起き上がることもできない。

「だめだ！マーベラス！助けてよ！」

彼女は襲い来る化け物どもを見て、目に涙を浮かべながら自らの顔を腕でかばった。彼女を襲う数匹のオークは一斉に彼女目掛けて積み重なった。彼女はあまりの大群のオークの重量に押しつぶされ、気を失った。オークの大群はまだ後方から互いにぶつかりながら襲ってきていた。そしてそのうちの一片が先ほどのオブジェにぶつかってしまった。

オブジェに何かスイッチが入ったのか、急に円錐形はブロック状に構成されていたかのように分散し、中から銀飾のブローチらしきものが現れた。そして何かが開放されたかのようにその周りの空気が澱(よど)み、次第に大きくなって周りのオークの巨体を弾き飛ばした。

ドォン！

その音に驚いたのか、うずくまっていたマーベラスが猫背になりながら振り向き、その状況を垣間見た。先ほどから襲ってきていたオークの群れは大半が何か大きな力に跳ね飛ばされ、倒れながら散らばっている。何が起きたのかよくわからない彼は、近くにオークの数匹の下敷きになっているガローダを見つけ、はっとした。

「く、くっそおお！」

彼は起き上がり、彼女の上に重なるオークに向かって足で蹴り上げ、そのまま腰につけていた剣を抜いた。そして、今まで見せた飄々(ひょうひょう)とした感じとは異なる勢いで彼女にかぶさる残りのオークめがけて切りつけた。

ウギョアウエァ！！

オークらは奇妙な叫び声で息絶えた。その息絶えた化け物の遺体に向かって彼はしきりに剣で切りつけた。目が血走っていた。

「こ、このやろう！くそっ！この！」

何度も叫びながら彼はオークの残骸に目掛けて切りつけた。剣にはオークから迸った異様な色の血がしたたり、彼の甲冑にもその色が映ってしまった。ある程度したところで彼は我に返った。

「はっ！お、俺は何を・・・」

そう言って、自分の目の前にある化け物の残骸と、その下に倒れたガローダの姿をみて嗚咽(おえつ)を吐いた。

「うううう・・・」

しばらくそのままの状態が続いた。正気を取り戻したのか、彼はガローダに向かって詰め寄り、上に積み重なる化け物を払いのけた。

「大丈夫か！？ガ、ガローダ、しっかりしろ！」

ガローダは目をつぶったまま動かない。彼は、彼女の体を揺さ振ったが、何も反応がない。

「だめだ……。どうすりゃいいんだ」

悩んでいる彼は、少し彼女の顔を見ながら、自分の顔を振り上げた。

「そうだ！お坊さんだ！あの人ならガローダを治してくれるはず」

そう言った彼は持っていた剣を放り投げ、彼女の体を背負いながらガンダルアと私が向かった道に入っていった。

二人の立ち去った場所には、オブジェに仕込まれていた銀飾のブローチが取り残されていた。